

---

**黒魔術師松本沙耶香 人形篇**

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

黒魔術師松本沙耶香 人形篇

### 【Nコード】

N6983A

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

退廃の魔都東京。その退廃の中心である銀座のあるバーに姿を現わした漆黒の美女松本沙耶香。彼女が学園で起こる怪奇な事件の謎の紐を解いていく。シリーズ第二弾。松本沙耶香がその魔術で学園の連続失踪事件に向かいます。同時に美女、美少女を籠絡していきます。

## 第一章

黒魔術師

松本沙耶香 人形篇

一千万の煩惱と欲望をその中に包み込んでいる魔都東京。眠ることのないこの街はこの日もその妖しい黒い輝きを放ちつつその爛熟した繁栄を夜の世界に映し出していた。

その中心の一つにあるのが銀座であった。ここでは毎夜美酒と享樂の宴が繰り広げられている。この街が江戸と呼ばれていた頃より栄えていたが江戸が東京となり、そして震災と戦乱により二度焼け落ちてからはこの街の数多い頹廢と美麗の中心の一つとなっていた。今宵もその頹廢と美麗の中に酔いしれる人々が濃紫の夜の中に集っていた。今そこに一人のうら若き女性が足を踏み入れたのであった。

黒い髪を肩のところで切り揃えている。今の若い女性にしてはやや小さく、華奢な身体を黒く、丈の長い法衣の様な気品のある服で覆っている。その顔は化粧気がなく、素っ気無いものである。だがもととなる顔立ちそのものは整っていた。卵を少し低くした様な形をしており、白い透き通る様な肌にはつきりとした二重の大きな瞳。赤い唇は小さく、そして頬はほのかに赤くなっている。それは酒のせいであろうか。

いや、それは違っていた。この街に戸惑いを覚え、悩んでいるのであった。彼女はこの街に対していい感情は持つてはいなかった。

多くの者を魅了し、その中に包み込んできたこの銀座はそれと同じ時に墮落した魔窟と多くの者に蔑まれていた。彼女もその蔑む者達の中にいたのである。だが今日その魔窟の中に足を踏み入れてしまった。彼女はそれを恥じ、戸惑っていたのだ。どうしても入りたくはなかった場所に足を踏み入れてしまったのだから。

「確か」

彼女は左右を見回していた。そして何かを探していた。

「この近くだったというけれど」

フランスのある小説家の書いた作品の主人公を看板に使っているというその店。その店については彼女も本で読んだことがあるので名前だけは知っていた。そしてそこに通っていた客も。

その中には彼女が学生時代に好んで読んでいた作家もいた。北の国に生まれ、端正な顔と女性的な作品で知られた作家である。

他にも多くの作家がこの店を訪れたという。その中には文豪もいればもうその名前が人々の記憶から消え去ろうとしている作家もいる。東京で客死した作家にある作家の墓前で自害した作家に。多くの作家がこの店を訪れ、酒を楽しんだという。文学を知る者にとっではちょっとした店である。今彼女はそこを探していたのだ。

もう少してそれが見つかる筈である。その間版はとも目立つものだからという。それは何か。他ならぬそのフランスの小説家の主人公が看板にいるからである。そして彼女の前にその主人公が姿を現わした。

シルクハットに片眼鏡をかけた彼がそこにいた。彼女がイメージする彼とはかなり違っていたがそのキザにも見える風貌は紛れもなく彼であった。彼は彼女を黙って見詰めていた。

「ここね」

間違いなかった。そこ以外に有り得ない。彼女は意を決した顔で彼の下にある黒い扉の前に立った。そしてそこに手をかけゆっくりと開いた。鈍い音が聞こえたように感じた。

中に入るとそこは彼女が写真で見たままの姿であった。古めかしいつくりであり、キャンドルで照らされている店の中は何処か古ぼけていた。その中は思ったより狭い。カウンターの他に席はなく、そこにいた数人の客達は黙ってカクテルを少しずつ飲んでいく。カウンターの客席の後ろと、バーテン達の後ろにボトルが並んでいる。店に入っただけで酒と木の香が漂ってくるようであった。

彼女は席を探した。端の席が空いていた。そこからは店の入口が

見える。その席が空いているのを見てほっとしたものを感じていた。「あの」

そして店の者に声をかける。ベストに蝶ネクタイの如何にもといった格好のバーテンであった。

「端の席に。座って宜しいでしょうか」

「ええ、どうぞ」

バーテンはそれに応えて彼女にその席を勧めた。彼女はそれを受けて店の奥へと向かった。見れば店には今までここに来た作家達の写真が飾られている。それは何れも彼女が知っている作家ばかりであった。

あの端整な顔の作家もいる。彼にしては珍しくネクタイにベストといった格好で椅子の上に胡坐をかいて座っている。終戦直後の写真らしい。この時彼は流行作家になっており、その混乱の中である文豪と激しく対立していた頃であった。その最中でここで飲んでいたのだ。

彼の左には彼と同じくその文豪達と戦った作家達が並んでいた。皆ここで飲んでいたので。そして同時に戦っていたのである。彼等は無頼に生き、そして無頼の中に死んだ。戦争の後の混乱と頽廃の中で彼等は生きていた。その輝きは一瞬のことであった。人々の記憶からも忘れ去られようとしている。だが彼等がかつてここにいたという事実は今もここに生きていたのであった。

彼女はその写真を見ながら店の奥へと向かう。そしてまずはそこに座った。

「メニューは」

座ってから尋ねた。だがその返事は意外なものであった。

「うちにはメニューはありませんよ」

「えっ」

それを聞いて少し驚いた。その整った人形を思わせる顔が微かに動いた。

「そのかわり料金は高くはありませんので」

「いえ、それでも」  
メニューがないということは彼女にとってそれだけで驚きだったのである。

「まあそれが昔からのうちのスタンスですので。驚かれましたか？」  
「はい」

まだ戸惑いが残っていた。こくりと頷く。

「最初にうちに来られた御客様はそういう方が多いんですよ。まあすぐに慣れますよ」

「はあ」

「そして何をお求めですか？」

「ワインを」

彼女は言った。

「ロゼで。ありますか」

「ボトルで宜しいですか？」

「はい」

彼女は答えた。

「それでなければ駄目なようなので」  
「？」

バーテンはそれを聞いて怪訝な顔をした。

「駄目とは」

「いえ、何でもないです」

だが彼女はその言葉は誤魔化した。

「こちらの話ですので」

「そうですね。ではどうぞ」

バーテンはカウンターから一本のボトルとガラスのグラスを出してきた。

「ごゆっくり」

「はい」

彼女はこくりと頷きグラスに入れられるロゼのワインを見ていた。それはトクトクとガラスの中に入りそのグラスを薔薇色に染めてい

た。彼女はそれ越しに店の中を見回していた。

店の中の客達は会社帰りのサラリーマンやOL達ばかりであろうか。かつて多くの文豪達が入り込んでいたとは思えない程ごく普通の店である。だがその店の香りは何処か違っていているように思えた。それは今目の前にあるワインのせいであろうか。彼女は今そのワインが注ぎ込まれたグラスを手を取った。

そしてそれを口に近付け含む。口の中をワインの赤く、退廃的な香りが支配する。少し飲んだだけでその誘惑に溺れてしまいそうな、そうした危うい香り、と魔性を漂わせていた。

その魔性を一口含むとそれまで映っていた全てのものが変わったように思えた。そしてグラス越しに何かが見えて来るのであった。

「いらっしやい」

だがバーテンの声がその目に映るものを真実だと教えている。今彼女が見ているものは現実の世界なのである。だがそれはとても現実の世界には見えないように思えた。

店の扉が開きそこから一人入って来る。薔薇色に染められたグラス越しにそれが映っている。黒いスーツと白いカッター、そして赤いネクタイに身を包んだ若い女性がやって来る。黒く切れ長の二重の瞳に白い、蠟の様に白い顔に薔薇よりも紅い唇。夜のそれよりも黒い髪は上で束ねている。その女性がゆっくりと店に入り、そして彼女のいる店の端へとやって来たのであった。

## 第二章

その女性は彼女の隣までやって来た。硬質の、それでいて低めの声で彼女に声をかけてきた。

「御呼び頂いてどうも」

うつすらと妖艶な笑みを浮かべて言った。その口の両端と目元だけで笑っている。

「松本沙耶香さんですね」

「はい」

女性は彼女の問いに頷いた。

「まさか本当に来られるなんて」

「この店の端に座り口ゼを頼まれた方の前に姿を現わすことになっておりますから」

その女松本沙耶香はこう答えた。

「まずは落ち着いてお酒でも飲みませんか」

「はい」

彼女は頷いた。そして沙耶香に席を勧めた。

「どうぞ」

「有り難うございます」

ここに奇妙なカッブルが出来た。女同士だがそこには妖しい雰囲気漂っていた。魔性を漂わせた黒い妖しげな魔女が神聖な衣を身に纏った聖女に言い寄る様な、そうした倒錯した雰囲気漂わせていた。

「では乾杯を」

「はい」

沙耶香も口ゼを頼んでいた。グラスに注がれたそのワインを手にとって彼女のグラスと打ち合わせる。それからゆっくりと飲みはじめた。

沙耶香は飲み終えた後で彼女に目を向けてきた。その身体にはも

う元からあつた妖しさの他にワインによる濃厚な色気も纏っていた。だがそれは男に対して向けられているものではなかった。彼女に、そう女性に対して向けられているものであった。

その妖しい色香を漂わせながら沙耶香は彼女に尋ねてきた。

「貴女の御名前は」

「絵里です」

彼女は答えた。

「森岡絵里と申します」

「そうですか、絵里さんですか」

「はい」

彼女、絵里はこくりと頷いた。

「いい名前です」

「有り難うございます」

「実は以前にも同じ名前の方と知り合いになりました」

「そうなのですか」

「いい方でしたよ。何かと」

そう語るその目に紫の光が宿った。

「不幸にして別れることになりましたが。また御会いしたいと思っています」

「はあ」

「そして貴女とも」

またあの妖しい、口の両端と目元だけの笑みを浮かべた。

「深く御知り合いになりたいものです」

「それは私もです」

絵里はこの時沙耶香が唯単に社交辞令で言っているだけ思っていた。

「これから。宜しく願いますね」

「わかりました。では」

沙耶香はここでグラスを一旦置いた。

「御用件は」

「はい」

絵里は畏まって話しはじめた。

「実は私が今勤めている学校のことですが」

「学校の先生だったのですか」

「はい」

絵里はまた答えた。

「実は今務めている学校で変なことが起きています」

「学校には怪談とかはつきものですね」

グラスをまた手に取ってから言う。

「ですが怪談みたいに実際にあるかどうか分からないといった話ではないようですね」

「おわかりですか」

「貴女の目を見れば」

沙耶香は答えた。

「その目がね。全てを語ってくれています」

そう言いながら絵里の黒い瞳を覗き込む。まるで琥珀の様に綺麗な瞳だ。今その瞳を沙耶香はその切れ長の、ブラックルビーを思わせる瞳で覗き込んでいたのであった。それは獲物を狙う豹のそれにも似ていた。

「私の目が、ですか」

絵里はここでどきりとした。まるで沙耶香が彼女を狙っているように感じたからだ。それはある意味において正解であった。

「まあ飲みながらお話をしましょう」

沙耶香は酒を勧めてきた。

「まだ夜ははじまったばかりです」

「はい」

「夜は酔っている方が楽しいですから」

「酔っている方が」

「ええ。そしてそれは酒に酔っただけとは限りません」

また口の両端で笑っていた。

「酔い方にも色々あるのですよ」

「お酒だけではないのですか？」

「あくまでそれは酔う方法の一つに過ぎません」

その瞳に濃厚な頹廢が宿った。

「他にも。色々あるのですよ」

「色々」と

「ですが今は酒に酔うことにしましょう」

絵里のグラスにその薔薇色の滴りを注ぎながら言う。

「それで宜しいでしょうか」

「はい」

酔うことは罪である。倫理観の強い絵里は子供の頃からこう教えられてきた。今もそれは変わりはない。この街に足を踏み入れるのさえ躊躇っていた程である。

だが今は違っていた。今日の前に座る沙耶香の言葉にあがらうことは出来なかった。そして素直に頷きその勧めを受け入れた。彼女は溺れることにした。

「そして先程のお話の続きですが」

「はい」

絵里は沙耶香に顔を向けた。

「貴女の学校で起こっていることですね」

「そうです」

「そしてそれは」

「ここでは」

しかし大切なところで絵里はその目を左右に漂わせた。

「人がいますので」

「大勢のところではお話出来ない」と

「はい」

こくりと頷いた。

「わかりました。では場所を変えましょう」

沙耶香はそれを受けて話をする場所を変えることを提案してきた。

「二人きりでお話するのに丁度いい場所を知っていますか」

「二人きりで」

「はい」

沙耶香はまたあの誘う様な笑みを浮かべてきた。

「お酒を飲み終わってからです。宜しいでしょうか」

「ええ、それからで」

絵里はまたしても沙耶香の言うがままに応えた。そしてまた頷いたのであった。

「お願いします」

「わかりました。ではまずはお酒を楽しみましょう」

二人はまずはそのまま酒を楽しんだ。そして店を出て二人で夜の街に出たのであった。

銀座は夜といっても明るいものである。ガス灯が有名な場所であるがそれ以外でも眠ることがなく常に明かりで満たされていた。夜の世界に浮かぶうたかたの樂園であり、そこに集う者達はその仮初めの夢を共有していたのである。

光と闇のコントラスト、銀と黒が複雑に交じり合う中に今二人は立っていた。沙耶香はその横に絵里をしかと置いていたのであった。  
「東京の方ですよね」

「そうですね」

絵里は沙耶香の言葉に応えた。

「ですが銀座には」

「そうですね」

沙耶香はそれを聞き微笑んだ。今度は優しい微笑みであった。

「来られたことはありませんか」

「父や母の御供で。昼には来たことがありますか」

「どうやらかなり育ちのいい女性らしい。銀座は高級な店が立ち並ぶ場所でもあり、昼は所謂金持ち達が楽しげに買い物に興じる場所なのである。昼と夜で違う顔なのは人間と同じである。昼は淑女、夜は娼婦といったところか。」

「ですが夜は」

「どうですか、全然違うでしょう」

沙耶香は絵里の耳元でこう囁いてきた。

「この街は。昼と夜とで」

「はい」

絵里はその言葉に頷いて応えた。

「まるで。別世界です」

「夜のこの街に来られなかったのは何故ですか？」

「悪い場所だと思っていたからです」

絵里は言った。

「悪い場所ですか」

「はい。お酒といけない遊びがはびこっている。そんな場所だと思  
っていました」

「確かにそれはありますね」

沙耶香もそれは認めた。

「ここはそうした街です」

「ですから今まで足を踏み入れなかったのですが。夜には」

「けれど私に会う為にここにやって来た」

「そうです」

彼女は答えた。

「貴女なら。話を解決できると思ひまして」

「ではそのお話。ゆっくり聞かせて頂きましょう」

「はい」

二人はそのままある高級ホテルへと入った。ロビーに行くところ  
イ達が沙耶香の顔を認めて頭を垂れてきた。どうやらここは彼女に  
とって馴染みの場所らしい。

「こんなホテルで」

「何、大したことはありませんよ」

沙耶香は涼しい顔でこう答えた。

「このオーナーとは少し顔馴染みですね」

「はあ」

絵里にとっては何か信じられない話であった。

「部屋はもう決まっています。行きますか」

「ここで話するのはですね」

「その為にご案内したのですが」

「わかりました。それではお願いします」

「ええ」

沙耶香は頷いた。そしてエレベーターに入りそこから部屋に向かう。この時絵里は気付いていなかった。今自分が生まれたままの姿で漆黒の姿を持つ餓えた野獣の前にいるということ。知らなかったのであった。沙耶香は話をするだけが目的でここに彼女を誘ったのではないということ。世事に疎い深窓の中に住む彼女は知らなかったのだ。

「さてと」

部屋に入りキーをロックすると沙耶香はまず自身のネクタイを緩めてきた。

「あの、松本さん」

薄暗い部屋の中は広く、豪華な装飾がその中で見られた。絵里はその中央に立ちネクタイを揺るめた沙耶香に尋ねた。

「何故ネクタイを緩められるのですか？」

「野暮なことを言われますね」

それに対する沙耶香の返事は素っ気無いものであった。返事は素っ気なくともその物腰はそうではなかった。スーツとパンツを消し、緩めたネクタイも外す。髪を下ろしてカッターの前のボタンも全て外した。

そして自身の下着を絵里に見せつけてきた。黒いレースのブラにショーツ、そこに黒のガーターストッキングである。白い肢体はスーツの上からは全くわからなかったが均整がとれた美しいものでありまるでギリシア彫刻の様であった。その美しい身体を絵里の前に晒したのであった。

### 第三章

「二人きりで部屋の中にいたらすることは一つしかありません」  
「けれどそれは」

避けようとする。だがそれより前に絵里は捕まっていた。そして沙耶香の唇を自身の唇で受け止めてしまった。

「やっ」

舌が入ろうとする。だがその直前で口を離す。だがそこに一瞬の隙が生じてしまった。絵里はベッドに押し倒されてしまっていた。

「止めて下さい」

沙耶香から離れようとする。

「こんなこと」

「いけないことと仰るのですか？」

「勿論です」

絵里は困った顔で沙耶香を見上げて言った。

「女同士でこんなこと」

「おかしいことを仰る」

だが沙耶香はそれに従おうとはしない。

「女同士ではいけないと誰が決めたのですか？」

「それは神が」

「神、ですか」

その言葉を耳にした沙耶香は冷笑を浮かべた。

「神など。私には関係ないことです」

「えっ」

「私は魔術師なのですから」

「では貴女は」

「そう、私は神の世界とは別の世界に身を置く者」

沙耶香はゆっくりと語った。

「黒魔術師なのです」

「そんな、それでは私は」  
「大丈夫ですよ」

今度は絵里を宥めるようにして囁いてきた。囁きながらその黒く気品のある服を脱がしていく。

中から白いブラとショーツに守られた白い裸身が現われた。沙耶香のそれとは違い胸は小さい。だが細身に均整はあった。

「神を裏切るのでは、と思われているのでしょうか？」

「はい」

「罪を犯すのでは、と」

「その通りです。それは」

「罪なぞ何を恐れることはありませんよ」

沙耶香は絵里の左肩に舌を這わせながらこう言った。紅の長い舌がその白く柔らかな肌を伝っていた。

「神の力は赦しの筈です」

「はい」

「赦しは罪を犯さなければ得られないのですよ」

誘惑の言葉であった。そこには多分に詭弁が含まれていた。それと同時に絵里を自分の魔性の世界に導こうという言葉であったのだが絵里はそれにあがらおうとしていた。

「けれど罪は」

「甘い罪なら犯すのもいいものです」

沙耶香はまた囁いてきた。

「それで赦しが得られるのなら。いいではありませんか」

「赦しが」

「そう、貴女は赦されるのです」

肩から口を離して言う。

「神により」

「神により」

その言葉を復唱した。もう目が虚ろになりかけている。

「甘い罪は清められるでしょう」

「では今から私が犯す罪は」

「清められるのです。いいですね」

「はい」

こくりと頷いた。もう自分が何を考えているのか、そしてどうなっているのか半分わからなくなっていた。夢幻の世界に身を沈めようとしていた。その沈む身体を今抱かれていることすらわからなくなってきた。誘惑に今全てを委ねようとしていた。

「さあ」

沙耶香はまた言ってきた。

「共に堕ちましょう、そして」

「犯すのですね」

「清められるべき、甘美な罪を」

こうして絵里は沙耶香に陵辱された。それは男では到底味わうことの出来ない倒錯した、半ば幻想の世界にある快樂であり絵里が今まで知っていたものではなかった。絵里は沙耶香にその甘い毒を心にも身体にも注がれた後で現実の世界に帰ってきた。その時には既に沙耶香はベッドの中で彼女の隣にいた。そしてその媚惑的な横顔を彼女に見せながら暗闇の世界に半身を起き上がらせていた。

「素敵でしたよ」

沙耶香は絵里にこう声をかけてきた。

「思った通りの方でした」

「思った通りですか」

「ええ。私も堪能させて頂きました」

そう言いながら手から煙草を取り出した。そしてそれを口に含む。指から火を出しそれを煙草に点ける。それから煙草を口から離して煙を吐き出した。闇の中に白い煙と青い煙が混ざり合った。

「そして用件ですが」

「はい」

絵里はベッドの中から応えた。肩から下はシーツに覆われている。「学校のことでしたね」

「ええ」  
彼女はその言葉に頷いた。

## 第四章

「実は奇妙な事件が起こってしまして」

「先程のお話ですね」

「そうです。学校から生徒が消えていつているのです」

「生徒が」

「はい、実は」

絵里はここから話しはじめた。彼女が今務めている学校はミッシェン系の学校であり絵里の母校でもある。長い歴史を誇る女子校であり幼等部から大学まであるという。その学園の高等部で今事件が起きているというのだ。

「失踪ですか」

「そうですね。それも一人ずつ」

彼女は言った。

「消えてしまつて。学校では密かに問題になっています」

「心当たりはありますか」

「いえ」

その言葉には首を横に振った。

「何が何なのか。全くわかりません」

「そうなのですか。では学校側もお困りでしょう」

「ですから貴女に御会いしに銀座まで来たんです」

「そうだったのですか」

「あのバーのあの席でロゼを飲むとやって来るといってお話を耳にして」

「ふむ」

ここでまた煙草を口に含んだ。

「行ったんです。どんな不可思議な事件でも解決してくれる方が来られると聞いて」

「そしてそこに現われたのが私だと」

「そうです。お願い出来ますか」

「今ここでお断りしたら貴女は困ることになるでしょうね」

「それはまあ」

何故かここで顔を微かに赤らめさせた。シーツを胸の前で握る。

「こんなことになりましたし」

今しがたの甘美な時のことである。罪とはいえ知ってしまったのは何かもどかしくもあつた。

「お願いです。どうか」

「報酬は学校側からで宜しいですね」

「それでは」

「はい。引き受けさせて頂きます」

沙耶香は煙草をまたその指に挟んで言った。

「この仕事。必ず解決して御覧に入れましょう。ですがその前に」

煙草を消した。文字通り闇の中にそれを完全に消してしまった。

それからまた絵里にその身体を寄せてきた。

「また。楽しみませんか」

「………はい」

絵里はこくりと頷いた。そしてまた沙耶香に身体を委ねた。こうして二人はまた甘い罪の世界に入り込むのであつた。

## 第五章

翌日沙耶香は絵里に案内されその学園にやって来た。そこは東京の高級住宅街の中にある学園であった。

「ここだったのですか」

沙耶香はその学園の門でこう呟いた。

「まさかとは思いましたが」

そこは東京どころか関東全域でその名を知られたお嬢様学園であった。歴史も古く明治時代にそのはじまりがある。通う生徒達は何れも良家の子女ばかりであり今も沙耶香の左右を黒いブレザーにチエックのスカートとネクタイの気品のある女生徒達がにこやかに穏やかな言葉で挨拶を交あわしながら校門に向かっていった。

「ここだったとは」

「もしかして驚かれていますか？」

絵里はそんな彼女の様子を見て何故そうなのかわからないといった顔を見せていた。

「昨日お話ししましたけれど」

「学校の名前までは聞いていなかったのです」

沙耶香はそれでもクールにこう返した。

「少し驚いただけです」

「特に驚かれることはないと思いますけれど」

彼女にとつてはそうであつても沙耶香にとつてはそうではないのである。だが絵里はそのことには気付いてはいないようであった。

「何はともあれまずは理事長のところに行きましょう」

「ええ」

沙耶香はそれに頷いた。

「私が案内致しますので。こちらですわ」

「わかりました。では」

絵里に導かれ校門をくぐつた。そして学園に入る。学校の中は色

取り取りの花と木々に囲まれ女生徒達の香が辺りに満ちていた。沙耶香はその中を進みながら校舎に入ったのであった。

校舎の中は意外と新しいものであった。沙耶香はその校舎を落ち着いた顔で見回していた。

「何か感じられましたか？」

「いえ、ここからは何も」

絵里の問いに答える。

「感じられませんね」

「そうですね」

「この校舎には何もありません」

「ですがこの校舎に教室を持っている生徒も姿を消しています」

「一体何人程ですか？」

「今で七人です」

彼女は答えた。

「それが何か」

「いえ、数も関係する場合があります」

沙耶香は言った。

「怪しげな輩が絡む事件はね」

「そうですね」

「あちらの世界の住人というのは変なことにこだわるところがあります」

「変なことには？」

「そうですね。例えば赤い服を着ている女の子だけを狙うとか美人だけを狙うとか」

「はあ」

「かと思えば無差別だったりします。まあ一概には言えないですね」

「随分と気紛れなんですね」

「人間だってそうですね」

「彼女はこう返した。」

「それは魔物だからでしょうか」

「そうです。魔物は我々とは何もかもが違います」

「頭の中もですね」

「そう、考えも。我々とは全く異なるのですよ。だから厄介なんです」

「では今回もすぐにはわからないでしょうか」

「それはこれから次第ですね」

二人は歩きながら話をしていった。校舎は白いが廊下は木製で黒い。沙耶香の服はそこに溶け込んでいる様に見えた。まるで影から浮き出ているかの様であった。

「私次第です」

「ではお願いしますね」

「これが仕事ですからね」

沙耶香は淡々とした言葉で述べた。

「そのかわりまた夜には」

「それは……」

絵里はその言葉を聞いて俯いて頬を赤らめさせた。昨夜のことを思い出したのである。

「ふふふ」

沙耶香はそんな絵里の顔を見て微笑んだ。あの妖艶で何かに誘い込む様な笑いであった。彼女は絵里のそんな顔を楽しみながら教室を進んでいった。そして二人は理事長室に着いた。

「こちらです」

「はい」

絵里に案内され部屋に入る。そこは赤い絨毯が敷かれた綺麗な部屋でありその中央には黒檀の大きな執務用の机があった。右手の棚には無数の表彰状やトロフィーが置かれている。学校の常としてこつしたものは飾られている。その側には旗が掲げられている。校旗だ。

左手には日章旗があった。国旗も校旗も綺麗なものであった。非

常によく手入れされていた。

そこまで見回したところで絵里が理事長に頭を垂れた。

「おはようございます」

「はい」

大人の女の声でした。だが執務用の机にはまだ誰もいなかった。

声は左の方から聞こえてきていた。見ればそこでコーヒーを入れている妙齡の女性がいた。

## 第六章

黒い髪を後ろで束ねておりその顔立ちはややきつめだが非常に整っている。濃紺の地味でおとなしめのスーツに身を包み黒いハイヒールを履いている。背も高く非常に美しい女性だが何処か余裕を感じさせないものがあつた。

「おはようございます」

こちらに顔を向けて挨拶をかけてきた。そしてまずはその手に持つコーヒークップを机の上に置いた。

「昨日お話したことです」

「こちらの方ですね」

「はい」

絵里は頷いた。

「おいで頂きました」

どうやら絵里は事前にこの女性に話をしていたらしい。沙耶香は二人のやり取りからそれを察した。それを見てここは絵里に合わせることにした。

「はじめまして」

沙耶香はそれを受けて頭を垂れた。

「松本沙耶香と申します。探偵です」

「探偵さんですか」

「はい。こちらの森岡先生にお話をして頂きこちらまで参りました。ここは身分を偽つた。そのうえで名乗つた。

「そうなのですか」

「宜しく願ひします」

「わかりました。私はこの学園の理事長を務めています」

彼女は言つた。これは予想通りであつた。

「神楽坂由梨と申します」

「神楽坂理事長ですね」

「はい」

彼女は頷いた。

「数年前からこの職に就いております」

立ったまま言った。座ることがないのはこちらに配慮しているの  
であろうか。

「そうなのですか」

「はい。ところで事件のことは御聞きですね」

「ええ、既に」

沙耶香は答えた。

「森岡先生から」

「そうなのです。今それで学園内に不穏な噂が流れております」

そう語る理事長の顔に暗い影が差した。

「変質者が学園内に潜んでいるとも。また攫われているとも」

「どちらにしろ剣呑な話ですね」

「正直こちらとしてもどう対処していいのか困っているところでした。そこでこちらの森岡先生が知り合いにいい探偵の方がおられるとお話して下さいまして」

「はい」

ここで絵里が応えた。二人のやり取りを見ているとどうやらこの理事長はその顔立ちから考えられるよりも少し若いらしい。絵里より少し上といったところだろうか。

「それで森岡先生に無理を申し上げて来て頂きました。お願い出来るでしょうか」

「はい」

沙耶香はまずは頷いた。

「喜んで」

「左様ですか。有り難うございます」

理事長はそれを聞いてその細い切れ長の目を微かに綻ばせた。

「ですが条件があります」

「それは」

だが沙耶香のこの言葉にすぐにその目を元に戻した。

「捜査に関してです」

沙耶香は言った。

「この件に関しましては私に全てお任せして頂きたいのですが、  
そう言いながら理事長を見た。そして反応を見守った。

「如何でしょうか」

「はい、それでしたら」

理事長はそれに応えて言った。

「宜しく願います」

「有り難うございます」

「全ては貴女にお任せ致します」

「はい」

「ですが何かあれば森岡先生か私にお話して下さいね」

「それはわかっております」

沙耶香はまた答えた。

「おかしなことがわかり次第お話していきますので」

「はい」

「では早速はじめさせて頂いて宜しいでしょうか」

「今からですか」

「そうです」

沙耶香はその黒い宝玉に似た目を輝かせた。

「依頼された仕事はすぐにはじめるのが私の流儀ですから」

「わかりました。それでは願いますね」

「畏まりました」

こうして沙耶香は正式にこの事件に対しての捜査と解決を受けることになった。彼女には全権が与えられ絵里が彼女の世話役になった。そして報酬の件まで話が済むと彼女は理事長室を後にした。

## 第七章

既に廊下には誰もいなかった。静まり返っていた。

「授業がはじまるのですね」

「はい」

絵里がそれに答えた。

「もうすぐ一限目がはじまりますので」

「そういえばそういう時間ですね」

懐から黒い懐中時計を取り出した。銀の鎖で繋がれた古風な時計だ。それで時間を見た。

「懐中時計ですか」

「ええ、これも案外いいものですよ」

沙耶香はその黒い時計を見せながら言った。

「アンティークな感じがね。いいですよ」

「はあ」

「腕時計よりもこちらの方が好きなんですよ」

「左様ですか」

「時計はね、古風なのがいいです」

沙耶香はうつすらと笑ってこう述べた。

「壁にかける時計も。古い時計の方がいい」

「わりかし古風な御趣味なんですネ」

「そうかも知れませんが、少なくとも時計に関しては」

そして彼女もそれを認めた。

「同じ時間を指し示すのなら雰囲気がある方がいいでしょう」

「それが好きですか」

「他人に自分を趣味を無理強いしたりはしませんかね。私はそちらの方が好きなんですよ」

「成程」

「ところで森岡先生」

「はい」

ここで名前を呼んだ。

「先生は授業は」「今日のこの時間は受け持ちの時間はありませんので」

絵里はこう答えた。

「松本さんと御一緒に緒させて頂きます」

「そうですね。それでは校舎を一通り見回りたいのですが宜しいですか？」

「はい、どうぞ」

絵里はそれを認めた。

「やはり何処に何があるのかを知っておくのは捜査の基本でしょうから」

「その通りです。では行きますか」

こうして沙耶香と絵里はまずは校舎内を一通り回った。回ったのはこの高等部の校舎だけであつたがそれでも全て回り終えた時には一限目が終わってしまったていた。

「申し訳ないですが」

「次の時間は授業ですね」

「はい。またお昼にでも」

「わかりました。とりあえずは一人でこの学園内を見回ることになります」

「御一人ですか」

「ええ。とりあえずはこの学園の中全てを見ておかないと捜査になりませんかからね」

「わかりました。では御気をつけて」

「ええ」

沙耶香は絵里に頬笑みを返して別れた。そしてそれからその言葉通り学園内を回りはじめた。高等部だけでなく幼等部や初等部、中等部、そして大学まで回った。

回ってみれば実に広い学校であつた。可愛らしく、そして気品の

ある少女達が学園の中に満ちている。大学に行けば行ったでそこには花が咲き乱れていた。かぐわしく、麗しい。沙耶香は仕事ながらこの学園が非常に気に入った。

「いい学校ね」

大学のキャンバスを歩きながらこう呟いた。

「可愛い女の子が一杯いて」

制服はどれもいいデザインであり大学でも学生達はいい服を着ている。グラウンドを見れば半ズボンから素足を出して走ったり跳ねたりしており、テニスコートやプールでもその美しい身体を見せている。おそらく異性が入ったならばそれだけで心乱れることだろう。これは沙耶香とても同じであった。

「風景も建物も綺麗ときている。お嬢様学校は違うということかしら」

そう言いながら大学の教会の前で立ち止まる。カトリック系の学園であるとは聞いており、至る所に教会があった。高等部にもあったし他の場所にもある。当然大学にもあった。沙耶香はその大学の教会の前で立ち止まり一服の為に煙草を取り出した。だがここで突如として後ろからお叱りの声が飛んで来た。

## 第八章

「これ」

「おっと」

それを聞いて慌てて煙草をしまった。

「ここは喫煙場ではありませんよ」

「それは失礼」

沙耶香はそれを受け煙草を完全に身体の中に隠した。それから声がした方に顔を向けた。

そこには一人のシスターがいた。楚々とした顔に見るからに清らかなシスターであった。黒い法衣にその全身を包んでいる。

「神聖な教会の前ですから」

「そうですね」

沙耶香は応えながら実は心の中で舌を出していた。黒魔術師である彼女は教会とは無縁の存在であるからだ。かつてローマカトリック教会が一方的に決め付けた様に魔術はキリスト教の敵ではない。むしろ異教であるかキリスト教のローマカトリックのそれとは違った形の信仰であると言っている。魔術にも色々あり沙耶香のそれは古代ゲルマンやケルト等の流れに入る異教的なものである。

「申し訳ありませんがそうしたことはお控え下さい」

「喫煙場所はどちらですか？」

「あちらのベンチでも」

そのシスターは前を指差した。見ればそこには木製のベンチがありそこに灰皿もあった。

「宜しければあちらをお使い下さい」

「わかりました。それでは」

「あの」

「まだ何か」

そのベンチに向かおうとした沙耶香にまた声をかけてきた。沙耶

香はそれを受けて彼女に顔を戻した。

「見慣れない方ですが一体」

「探偵です」

沙耶香は先程理事長に名乗った偽りの身分をまた名乗った。

「探偵さんですか」

「はい。実はこの学園でのある事件に関して捜査を依頼されましたね」

「高等部のことですね」

「御存知でしたか」

「はい。外では何ですから」

シスターは周りを見回してから言った。

「教会の中でも」

「わかりました。それでは」

煙草を吸いそびれたのが残念であったが事件に関する話が聞けるというのなら別であった。沙耶香は教会の中にシスターと二人で入った。

教会の中は礼拝堂とステンドグラスで飾られていた。青や黄色のまばゆいガラスが教会の中を照らしていた。礼拝堂の中央にはあの人物がいて二人を見下ろしていた。

沙耶香はその人物があまり好きではない。そして教会も実は好きではない。そもそもこの教会の為にどれだけの者が死に、どれだけのものが失われたのか。沙耶香はその失われたものを使う立場にいる者でありそれを考えるととても好きにはなれなかったのである。

だがそれは心に隠しておいた。黒魔術師というものは古来よりあらゆるものを隠しておかなければならなかった。その為彼女もここではその心を隠したのである。そしてシスターの話聞くことにした。

「まずは名乗らせて頂きますね」

シスターは教会の最前列の椅子で二人並んで座るとまずは名乗ってきた。

「私はシスターミカエラといいます」

「ミカエラさんと仰るのですか」

「はい。以後この名前で御呼び下さい」

「わかりました。私は松本沙耶香といいます」

沙耶香の方も名乗った。

「こちらの学園の理事長と高等部の森岡先生の頼みでこちらに参りました」

「高等部の森岡先生ですか」

「ええ。御存知で？」

「はい。同級生でしたので」

「これはまた」

意外なことであつた。見れば確かに彼女と同じ位の歳である。

「この幼稚園の頃から一緒でした。時には同じクラスだったことも」

「幼馴染みというわけですね」

「ええ。大学で彼女は文学部に進み国語の先生となりましたが私は神学部に進み」

「シスターになられたと」

「そうです。そして今こちらにおります」

「そうだったのですか」

「昔から優しくて大人しい子でした。それに清純で」

「はあ」

沙耶香はその時その話を聞いて内心思った。昨夜その清純な心が穢されたということ。そしてそれを誘い、穢したのは他ならぬ自分であることを。だがこれもまたあえて言わなかった。

「すごくいい子なんですよ」

「よく御存知なんですな」

「理事長もそうなんです」

「理事長も」

「ええ。私達の二年上の先輩です」

語るその言葉に憧れが入っていた。どうやら彼女はあの理事長に先輩としての尊敬の念を抱いているようである。

「昔からしつかりとして真面目な方でした。それでいて面倒見がよくて」

「そうなのですか」

「立派な方ですよ、本当に」

「成程」

表向きは参考に聞いていた。だが彼女の語り口から実はあまり参考にするつもりはなかった。どう見ても客観的なものではなかったからだ。

「理事長にもお願いされたのですね」

「そうです」

沙耶香は答えた。

「わかりました。では及ばずながら私も協力させて頂きます」

「それは有り難い」

社交辞令ではあったが少しは本気も入っていた。やはり内部事情に詳しい協力者がいてくれるというのは非常に有り難いからである。

「ではこれから何かとお話をお伺いさせて頂きますね」

「はい」

こうしてシスターミカエラと知り合いになった。とりあえず彼女と別れると沙耶香はまたキャンバスを見に回った。そしてあることに気付いた。

気が多いのである。そして花も。学校にこうしたものが多いのは何処でもそうであろうがこの学校は特にそれが多かった。至る所に木々があり、中には林みたいな場所まであった。

「林、ね」

沙耶香はそこに注目した。若し殺人事件ならば死体をこうした森や林の中に隠すこともあるだろう。ケースとしてはオーソドックスなものであると言えた。

だが彼女はそれはすぐに自分で否定した。よく考えればわざわざ

学校に隠す位なら何処か山奥にでも捨てればいいことである。ここでは一目につきやすい。夜でも当直の教師達の目がある。よってこの線は捨てた。

だが興味深い林であった。針葉樹が生い茂り、そしてその中にはベンチが置かれている。そして灰皿も。彼女はそれを認めて先程しそこねた一服をしようとした。

ベンチに腰掛け煙草を取り出す。そして火を点けた後で大きく煙を吐き出した。

「まずは一通り見回ったけれど」

それからこう呟いた。

「とりあえず学園の地図は頭に入れたわね」

それだけでもまずは大きかった。頭の中で地図が描けるのと描けないのでは捜査にあたって大きな違いがある。沙耶香はまずはそれを押さえたのである。

一服し終えたところで昼のチャイムが鳴った。ここで彼女は空腹に気付いた。

煙草を吸い終わったところで席を立った。そしてその足で高等部に戻る。戻ってみると絵里が彼女を待っていた。

## 第九章

「学園内を見て回られていたんですね」

「はい」

二人はとりあえず食事を探ることになった。沙耶香は並んで歩きながら絵里にこう言った。

「何かありましたか」

「シスターミカエラに御会いしました」

「彼女にですか」

「はい」

ミカエラの言ったことは事実であった。絵里の顔が明るくなった。どうやら二人は本当に幼馴染みであるらしい。

「静かで真面目な方ですね」

「はい、子供の頃からそうなんですよ」

絵里はそれに応えて言った。

「大人しくて真面目で。それで凄く優しくして」

「そうなのですか」

「昔から彼女には何かと助けてもらってます。いい娘ですよ」

「どうやらそのようですね」

何故か絵里もシスターミカエラと似たようなことを言っている。

この二人は案外似ているのかも知れないと心の中で思った。

「それで彼女からは何と」

「あちらとしても捜査に協力して下さるそうです」

「そうですか、それは何よりです」

「それに。可愛い方ですね」

「松本さん」

だが絵里はその言葉には怖い顔をしてみせた。

「何か」

「彼女はシスターですからね」

「それが何か」

「私に対してみたいなのは。許しませんよ」

「わかってますよ」

口の両端だけで笑ってそれに応えた。どうやらこれは戒めではなく嫉妬の様であった。女同士でも嫉妬というものはある。絵里は自分ではそれに気付いてはいなかったがその少しムツとした顔にそれが現われていた。それまでの清楚な顔とは全く違った女の、それも少女の頃の顔であった。

二人は食堂に着いた。そして食事を注文した。

「何にされますか？」

「チキンカツでももらいましょうか」

沙耶香は食堂の前のメニューを見てこう言った。

「セットで」

「では私はコロッケを」

見ればコロッケもあった。それもクリームである。

「頂きます」

「また豪勢ですね」

「何がですか？」

「いえ、こうした学生食堂でクリームコロッケなんて」

沙耶香は言った。

「普通はジャガイモのコロッケばかりだというのに」

「そうなんですか」

「他の学校ではね」

彼女はこう述べた。

「大抵そんなものですよ」

「はあ」

だが絵里にはその実感はないようであった。やはりここはお嬢様学校であった。食べ物一つとってもそんな調子であった。沙耶香はあらためてそれを認識することになった。

並んで料理を受け取る。見れば素材も調理も非常にいい。普通の

大学のそれとはまるで違っていた。

沙耶香はとりあえず何も考えることなくただ自分の番を待っていた。だがここで一人のシスターが奇妙な注文をしていることに気付いた。

「いつものでお願いしますね」

「いつもの？」

それに気付いてそのシスターを見た。絵里やシスターミカエラとは全く違った雰囲気の大人の女性がそこにいた。髪は隠しているがその顔は日本人離れしたものであり彫りが深く、そして鼻も高かった。目は切れ長でまるで描いたかの様にはつきりとした二重であった。口は少し大きく、そして唇は赤い。日本人にスペイン人の感じが入ったような顔立ちであった。背もスタイルも鮮やかなものであり、普通のシスターには見えなかった。

「わかりました、シスター」

調理の者がそれに応える。そして肉も魚もないメニューを彼女に差し出した。

「どうぞ」

「有り難うございます」

そのシスターは微笑んでそれを受け取った。そしてそのままレジに向かった。

「あの」

沙耶香はそれを見て絵里に声をかけた。

「何でしょうか」

「ここはカトリックですよね」

「はい」

彼女は沙耶香のその言葉に頷いた。

「確かカトリックは肉食は禁じていなかったと思いますが」

「ああ、あの方ですね」

それを聞いて絵里の方でもピンときたようであった。

「あの方は特別なんです」

「特別」

「シスターデリラですよ」

「あの方デリラと仰るのですか」

「はい。あの方はベジタリアンなんですよ」

そしてこう説明した。

「何でもお肉やお魚は受け付けないらしくて。それで」

「そうだったのですか」

どうやら教義の問題ではなく個人の趣向であつたらしい。

「それでいつもああした特別な食事を注文されているのですよ」

「成程」

こうした人物はやはりいるものである。菜食主義はやはり殺生を禁じるという考えから昔から存在していた。日本でも古くからあり、江戸時代まで肉は食べなかつた。猪の肉を当時鳥の仲間だと考えられていたモモンガの仲間だと強引にこじつけて食べたりしていた。

徳川幕府の最後の將軍徳川慶喜は豚を食するという理由で大奥であり好かれていなかったという話も残っている。

菜食主義自体はやはり清らかに見えるものだ。だがだからといってそれを行う人物までもが清らかとは限らない。あのヒトラーは肉も魚も口にしない菜食主義者であつた。彼は酒も煙草もやらず、そして女性に対しても清潔であり、服や住居、蓄財にも興味がなかつた。住居や蓄財はともかく酒や煙草、そして女に対しても清潔だつたとは沙耶香から見ればそれだけで人生の意義がないものであるが、「ですから御気になさらずに」

「わかりました」

だが沙耶香はここであるものを感じた。それはそのシスターデリラから妙な気を微かに感じたからだ。それは彼女がよく接する類のものであつた。

だがそれは微かであり、なおかつ一瞬のことであつた。その気は忽ちのうちに感じられなくなり、完全に消え失せてしまつたのであつた。

沙耶香は気にはなつたがそれから離れるしかなかった。そして食事を受け取り絵里と向かい合つて席に就いた。食べながら今後のことについて話した。

「午後はどうされるのですか？」

「また学園内を見て回ります」

沙耶香は答えた。

「まだ細かく見ていないところもありますので」

チキンカツをフォークとナイフで切りながら言う。なおライスではなくパンを頼んでいた。

「そうなのですか」

「今日はそれで一日を潰すことになると思います」

「まずは下準備ですね」

「そうですね。本格的な捜査は明日からです」

彼女は言った。

「それで宜しいでしょうか」

「朝に理事長も言われましたが」

「はい」

「捜査に関しては全て松本さんにお任せしておりますので。是非それで」

「わかりました。では」

こうして彼女は午後も学園内を見回った。それからまた一通り見回した後で今度は高等部に戻った。細かい部分をもう一度見回していた。

それぞれの部活の部室の前も通った。そこで面白い部を見つけた。

「こんな部活もあるのね」

部室の扉には人形部と書かれていた。沙耶香はそれを見て呟いた。一体何なのかしら」

だが細かいところはわからない。一体何をする部活なのか。少しわかりかねていた。

「あの」

ここで右手から彼女に声がかけられた。

「何かしら」

「人形部に何か御用ですか」

そこには高等部の制服を着た一人の少女が立っていた。茶色のポニーテールに大きな瞳を持つ清楚で美しい少女であった。

「用はないのだけれどね」

沙耶香はうつすらと笑ってこう応えた。

「ただ。どんな部活か興味があつて」

「人形に興味がおありなんですか？」

「ええ、まあ」

社交辞令でこう答えた。自分が何者かを隠す為でもあった。

「どんなことをしてるのか気になって」

「わかりました、それじゃあ」

少女はそれを聞いて部室の扉の前にやって来た。

「是非お邪魔して下さい。お茶でも飲みながらお話ししましょう」

「いいのかしら、はじめてここに来るのだけれど」

「ええ、それでも。人形に興味を持って頂けるのなら」

それでも少女は構わないと言った。そして沙耶香を部室に招き入れた。こうして彼女はその部室で少女と人形について話をする事になった。

## 第十章

部室の中は教室を使ったものであった。どうやらこの学校は空いている教室を部室に使うらしい。中は少女らしい装飾が施され、そして所々に様々な人形が飾られていた。日本の人形もあればフランス人形、マネキン等もある。色々と作ってあるらしい。

「どうぞ」

部室にあるソファーに座らせられた沙耶香に少女が紅茶を勧めてきた。

「紅茶ですけどね」

「有り難う」

「お砂糖はありますか？」

ピンク色の動物の形をした砂糖を差し出して来た。だが沙耶香はそれは断った。

「砂糖はいいわ」

「そうですね」

少女はそれを聞いて砂糖を引つ込めた。

「なら仕方無いですね」

「御免なさいね。そのままの紅茶が好きだから」

「ストリートですか、本当の」

「まあ気分次第でクリームを入れたりはするけれど」

くすりと笑いながら言った。

「けれど今はそれもいいわ。気を使わなくて」

「はあ」

少女はそうしたやり取りの後で沙耶香の向かい側の席に座った。

「ところでどちらから来られたのでしょうか」

「私？」

「はい。大学の方でしょうか」

「ええ、そうよ」

「ここはまたしても身分を偽ることにした。」

「大学院でね。文学を学んでいるの。」

「学者さんですか？」

「少し違うわね。まあ研究はしているけれど。」

「もっともらしい嘘をつく。嘘をつくのは得意だ。嘘は言葉の魔術の一つである。人の心を惑わせる為に言葉は重要な意味を持つのである。」

「イギリス文学をね。専攻しているの。」

そして嘘を続けた。

「というところシエークスピアとかですか？」

「残念だけれど違うわ。」

これは本当であった。

「私が研究しているのは童話とかね。妖精が出る。」

「メルヘンですね。」

「ところがそうじゃないのよ。」

ここも本当であった。

「妖精はね、意外と怖いものなのよ。」

「そうなんですか？」

「ええ。人を襲って殺したりね。そういうことをするのよ。妖しく笑ってこう述べる。」

「本当は怖いものなのよ。」

「じゃあ童話のあれは大人しい妖精なんですね。」

「比較的ね。」

それを聞いて驚いている少女に対して言った。

「まあ怖いものが好きな人にはいいでしょうけれど。」

「怖いのが好きな人なんているのですか？」

「人それぞれよ。」

沙耶香はまた言った。

「それに怖いというのはね、ある意味気持ちいいのよ。」  
「気持ちいいんですか？」

「ええ」

ここで彼女は辺りを見回した。どうやら部室には今彼女と少女しかいない。

「ところで他の部員の方は？」

「まだ来ていません」

少女は素直に語った。

「いつもこうなんです。私が来て三十分程してから皆来るんです」「そうなの」

「ですから。暫くはこうして二人でお話が出来ます」

「だったらその怖いことの気持ちよさも教えてあげることが出来るわね」

「教えるって？」

「こういうことよ」

その瞬間沙耶香の目が赤く光った。

「えっ」

少女はその赤い目を見た。その目を見た途端動きが止まった。

「これは……」

「今からわかるわ」

沙耶香はゆっくりと少女の側に寄って来た。

「怖いというのはね。知らないからなのよ」

「知らないから」

「そうよ。何でも知ってしまえば怖くなくなるわ。そして知らないことに怯えるのもまた」

その身体を少女の上に覆い被さらせる。

「快樂なのよ。知っていくのもね」

「何を」

「その恐怖と快樂を教えてあげるわ」

少女の制服のネクタイを外した。身体をゆっくりとソファに寝かせる。

「はじめてよね」

「こんなこと」

強張った声で答える。まだ金縛りは効いていた。

「今まで考えたことも」

「怖いでしょ」

「止めて下さい」

少女は震える声で言った。

「結婚を決めた人とでない」と

「古風なことを言うわね」

貞操観念というものであった。だがそれは沙耶香にとって最も嘲笑すべきことの一つでしかなかった。

「けれどそれは相手が男であった場合ね」

沙耶香は述べた。

「女が相手だと。それは通じないわよ」

「そんな……」

「いいわ、その怯える瞳」

その怯えが沙耶香の欲情をさらに高めた。

「そしてそれを越えた時貴女はどんな顔をするのか。見せてもらおうわ」

こうして少女は沙耶香の腕の中に落ちた。沙耶香はこの少女の青い身体を隅々まで味わい、堪能するのであった。

## 第十一章

それが終わると沙耶香は起き上がり服を整えた。唇を彼女の口から離れた。唾液が舌と舌を伝った。

「素敵だったわ」

沙耶香は乱れた服のまま横たわる少女に対して言った。

「見せてもらったわ、その素敵な姿」

「こんなこと……」

「嫌だったとは言わせないわよ」

否定はさせなかった。

「そこまで乱れておいて」

「乱れたなんて」

「怖かったかしら」

「最初は」

「そう。けれどその怖さでさえも快樂だったでしょう」

「……」

黙るしかなかったが否定は出来なかった。沙耶香の言う通りだったからだ。

「怖さもまた。気持ちいいものなのよ」

「そして身体を預けるのも」

「女にしかわからないことがあるのよ」

テーブルの上の紅茶を口に含む。紅の香が口の中を支配し、少女の香りと混ざり合った。そしてそれは沙耶香の中へとゆっくりと滴り落ちていった。

「それが今わかったわね」

「はい」

少女はゆっくりと起き上がった。自身の服の乱れをなおしながらこくりと頷いた。

「まだ経験はなかったのね」

「はい」

「男の人とも」

「勿論です。結婚する人と以外は」

「男の人にはね、それでいいのよ」

それは深い頹廢の意味を含んだ言葉であった。

「他の男と寝るのは浮気になるけれど女と寝るのは浮気ではないのよ」

「では何なのですか？」

「本気よ」

沙耶香は言った。

「男との愛は仮初めのものだとしても女との愛は現実のものなのだから」

「男の人がお嫌いなんですか？」

「まさか」

だが沙耶香はそれは否定した。

「私は女の子だけを愛するわけではないわ」

「では何でこんなことを」

「今は女の子が好きだから」

彼女は言った。

「好きになる男がいないだけ。それでわかったかしら」

「何かおかしいです」

「何が？」

おそらく次には常識とやらを出すのだろうと思った。沙耶香にはわかっていった。

「こんなこと。普通は」

「この学校の教えだとそうかも知れないわね」

沙耶香は答えた。そう、キリスト教の教えならば。

「けれどももっと他のことを知りなさい、そうすればこつした愛もあるのだから」

「そんなことはないと思います」

「今はね。そう思っているかも知れないけれど」

沙耶香は違うと言った。

「あるのよ。実際にね」

「こんなことが」

「そう、全ては現実であり夢幻でもある」

その言葉が幻想の世界に入った。

「愛もまた同じ。何か絶対的に正しくて、絶対に間違っているということはないのよ」

沙耶香自身も夢幻の世界に入ったかの様であった。その姿が朧になった様に見えた。そして少女はまるで麻薬に溺れたかの様にその漂う世界に自分も入るのであった。

少女との一時を終えた沙耶香は教室を離れようとした。だが思い直して扉のところで立ち止まった。

「二つ程聞いておくことがあるわ」

「何ですか？」

「貴女の名前は？」

「真由子です」

少女は名乗った。

「斉藤真由子と申します。この学園の高等部の一年です」

「そう、真由子さんというの」

沙耶香はその名を聞いてその黒い切れ長の目をさらに細めた。

「覚えておくわ。私の愛しい人として」

「そんな」

それを聞いて俯いて顔を赤らめさせた。

「そしてもう一つ聞きたいのだけれど」

「何ですか？」

「ここの部活は活動しているのかしら」

「はい、今もやっていますよ」

彼女、真由子はこう答えた。

「私を入れて八人でやっています」

「そこに顧問の先生も入れてね」

「はい。デリラ先生がやって来てくれています」  
「デリラ先生」

それを聞いた沙耶香の眉が動いた。

「若しかしてシスターデリラかしら」

「御存知なんですか？」

「ええ、ちよつとね」

沙耶香は答えた。

「菜食主義の人よね」

「はい」

「あの人が顧問だったの」

「先生の作られる人形って凄いですよ」

「そんなに」

「本当に正確で綺麗で。まるで生きているみたいで」

「生きているみたい、ね」

それを聞いてどういいうわけか不吉なものを感じた。

「そんなに素晴らしいのね」

「はい。御覧になれますか？」

「よかつたら」

彼女は頼んだ。

「見せてもらえるかしら」

「わかりました、それじゃあ」

真由子はそれを受けて立ち上がった。そして部室の奥にある棚から一体の人形を取り出してきた。

## 第十二章

「これなんです」

「それなの」

見れば確かに見事な人形であつた。顔立ちも身体も人間のものそつくりであり、それでいて何処か浮世離れしていた。白い顔に柔らかい身体、何処か日本の人形を思わせるものがあつた。

特に髪の毛が。黒く、生きているようであつた。着せている服も和服であり赤く映えていた。

「凄いですよね」

「ええ」

沙耶香は素直にそれを認めた。

「本当に凄いわね」

「私こんな立派なお人形見たことないんですよ」

その声は少し興奮して上ずっていた。

「どうやったらこんなお人形が作れるのか。本当に不思議ね」

「これはもう才能ね」

沙耶香はその人形の細かい部分まで見渡しながら述べた。

「ここまで出来るのは。特に髪の毛と目が」

「はい」

「生きているみたい。まるで今にも動いたりしそう」

その髪はどうやら人間のものであるらしい。日本の人形に似たものを感じたのはここからであろうか。艶もあり、黒く光っていた。

「そんなんですよね。生きているみたいで」

「こんな人形を作られるなんてね」

素直に賞賛を覚えた。

「素晴らしいと思うわ」

「私も早く先生みたいなお人形が作られるようになりたいです」

真由子はうっとりとした声でこう言った。

「けれどここまでは無理ですよね、やっぱり」

「正直に言わせてもらうとこれはもう天才の域ね」

沙耶香はきつぱりと言った。

「本当にね。見事なものだわ」

「私じゃ無理ですかね、やっぱり」

「どうかしら、貴女にも才能があれば出来るかも知れないわよ」

月並みな言葉だがこう述べた。

「それか違うタイプのお人形を作るとかね。それはそれ、これはこれよ」

「とりあえずは頑張れってことですね」

「そうとらえてもらってもいいわ。それじゃあ」

そう言い残して彼女はそこから去った。それからまた学園内を歩き回るのであった。

その日はそれで終わりであった。帰る時になって絵里に声をかけられた。

「御自宅までですか？」

「はい」

沙耶香はそれに応えた。

「今日はこれまでで」

「そうなのですか」

「また明日来ますよ」

沙耶香はうつすらと笑ってこう述べた。

「それはわかっていますか」

「何か」

「いえ、てつきりこちらにお泊りになられるかと思いましたが」

絵里は何故か戸惑いながら述べていた。

「部屋も用意しておりましたが」

「いや、それは結構」

だが沙耶香はそれを断った。

「家は東京にありますし。すぐ来れますから」

「そうなのですか」

「それともまた二人で過ごされたいのですか？」

「えっ!?!」

どうやらそれが本音であつたらしい。絵里は頬を赤らめさせて驚いた顔を作つた。

「それは」

「ただ、今日は御容赦願いたいです」

「今日は駄目なのでしょうが」

「私の自宅ならばよいのですが」

「けれど今日は」

絵里は言つた。

「私当直でして」

「そうだったのですか」

「はい。けれどそれなら仕方ありませんね」

「こここの当直室はどちらにあるのでしょうか」

「教会の後ろです」

彼女は答えた。

「そこにあります」

「そうなのですか」

「若し宜しければ御一緒にと思つたのですが」

「申し訳ありません。教会ではね」

沙耶香は一時気が向いたようであつたが教会と聞いてその気をなくしたようであつた。

「幾ら何でも神の御前で、というわけにはいかないでしょう」

「けれど」

「私がよくても貴女が」

沙耶香は言つた。

「流石にその罪は償いきれないのではないですか？」

それは神への冒瀆に他ならない。女と交わることですら罪だといふのに。その罪に誘うのは他ならぬ沙耶香であるが彼女はここでは

それを否定してきた。

「どうなのでしょうが」

「はい」

そして絵里もそれを認めた。こくりと頷く。

「その通りです」

「では止めますか」

「いえ、待って下さい」

「何か」

沙耶香は急に声をあげた絵里を見て目の中だけで笑った。目そのものは微動だにせず、何も変わってはいなかったがその中にある黒い瞳が笑っていた。まるで獲物を前にした虎の様に。確かに笑っていた。

「それでも、いらしてくれませんか」

「宜しいですね」

「……はい」

震えながらもこくりと頷いた。罪深いことであるのはわかってい  
る。それを冒すことが恐ろしい。だがそれ以上にその罪を冒すこと  
と沙耶香のもたらすであろう快樂への誘惑に耐えられなくなってい  
たのであった。だからこそ頷いたのである。

「是非いらして下さい」

「わかりました。それでは」

二人は教会に向かった。そして神と主、聖霊のいるその場所であ  
る罪深い夜を過ごすのであった。

## 第十三章

罪の夜が明け朝になった。二人は同じベッドの中にいた。

沙耶香は朝日を浴びてゆっくりと身体を起こす。そしてその白い裸身を起こしたまま言った。

「罪を犯せば犯す程美しくなる」

まだ眠っている絵里に対して言う。

「素晴らしい方だ。貴女は」

下着と服を身に着け部屋を後にする。そして煙草を口に啜えながら部屋を後にした。学校がその動きをはじめまでの暫しの散歩であった。

朝露に濡れた学園の中はやけに爽やかであった。朝日とその露に反射し、辺りに七色の光を浴びせている。沙耶香はその朝日と露を眺めながら学校の中を歩いていった。土も次第に温かくなってきており、空も青さを増してきている。世界も次第に目覚めようとしているのがわかった。

学校の中も。まだ誰もいないがその一日をはじめようとしているのがわかる。そこに入るであろう多くの者を待ち望んでいるように感じられた。

沙耶香はそんな中を一人歩いている。煙草の煙は朝露の中に消え溶け合う。煙草が短くなると火を点けその中に消してしまった。そして高等部の校舎を見上げたのであった。

「あそこね」

丁度頭の上に人形部の部室があった。

「今日も行ってみようかしら」

真由子に会いに。青い果実を味わうのも悪くはなかった。むしろ美味である。果実は食べられるうちに食べておく。それが沙耶香の流儀であった。彼女はそれを味わおうかと考えていたのであった。

あの部室に行けば、そう考えていた。だがここでその考えを中断

させた。

「!?!」

不意に誰かの影が見えたのだ。それは一体何か。気になった沙耶香はすぐに校舎の中に入った。部室に向かう。だが鍵がかかっている。それを見た彼女は魔術を使うことにした。

「それなら」

扉に手を当てる。するとその手が壁の中に入り込んでいく。そしてその身体も部屋の中に入っていった。彼女はそのまま教室の中に入ったのであった。

中に入るとそこには誰もいなかった。気配もなかった。それを見た彼女は気のせいかと思った。だがどうにも腑に落ちないものを感じていた。

調べてみれば扉は外から閉めるものであった。中からは閉められなくなっている。それを考えるとやはり誰かいた可能性はないのである。やはり気のせいであるとしか思えなかった。

腑には落ちないままであったがやはり誰もいないのは間違いなかった。もう一度壁から出るとそのまま部屋を後にした。そのまま絵里のいる教会に向かった。

教会の奥の質素な当直室に入ると絵里が起きていた。もう服を着て食事を摂っていた。食事は白いパンと牛乳であった。質素な食事である。

「お早うございます」

「はい、お早うございます」

沙耶香はそれに応えて挨拶を返した。

「起きてらしたのですね」

「ええ、少し前に」

沙耶香はそれに応えた。

「それで散歩に出ておりました」

「そうだったのですか」

「それはそうとお食事中だったのですね」

「はい。宜しければ松本さんも如何ですか？」

「朝は食欲がないと言いたいところですが」

だがそうではなかった。少し歩くとどうにも腹が空いた。

「こちらもお腹が空いています。宜しければ御一緒に宜しいですか」

「はい、どうぞ」

絵里はそれに応えて向かいの席を勧めた。沙耶香はそれに従い座ると彼女からパンを受け取った。

「学校のもので。御安心を」

「当直員の為のもですね」

「そうです。いつも用意されているものです」

「牛乳もですか」

「そうです。学校のものなので質素ですが」

「そうですかね」

だが沙耶香はそれには懐疑的であった。それはパンと牛乳を見てから述べたものである。

見たところこのパンと牛乳はかなりいいものである。やはりお嬢様学校だけはある。朝のささやかな食事も立派なものだと思った。

だがそれは口には出さない。それは黙ったままパンと牛乳を口にした。

## 第十四章

やはり美味しい。街のスーパー等で売っているものとは違う。かなり質のいいパンであった。

「美味しいですね」

「はい」

「これで質素ですか」

「そうではないのですか？」

「いえ」

言いたいことがあったが言うのは止めた。どうも言ってもわからないだろうと思ったからである。

どうもこの学園はお金持ちしかいないようだと思った。それも本当のお嬢様ばかりだ。今の沙耶香はさしづめその白い鳩の中に入り込んだ鳥であろうか。その清らかな鳩達を誘惑する鳥だ。だがその鳩達を蝕む何かを探す鳥でもある。誘惑し、同時に護る奇妙な鳥であった。

二人は食事を済ませると顔と歯を洗い磨いて職員室に向かった。もう生徒達が学校にやって来ていた。

「早いですね」

「部活がありますから」

「ああ、朝練というやつですね」

「ええ」

絵里は沙耶香のその言葉に頷いた。

「うちの学校は部活動にも力を入れておりますから」

「成程」

「私も学生時代は楽しくやっていました」

「スポーツをですか？」

「はい」

にこりと笑って答えた。

「ソフトボールを」

「意外ですね」

「そうでしょうか」

「ええ、ちよつとスポーツをされるとは思いませんでしたから」

「これでも身体を動かすのは好きなんですよ」

「はあ」

これは本当に意外であった。絵里の身体のこととはもう知っているがスポーツをしていたようには見えなかったからだ。最近身体を動かしていないだけであろうかとも思った。

「キャッチャーをやっていました」

「キャッチャーですか」

「はい」

これは彼女に合っていると思った。性格的なものである。

「そしてシスターミカエラがピッチャーでした」

「幼馴染みでのバッテリーですね」

「はい。シスターのボールは速くて」

実はソフトボールはかなり速く感じるのである。ボールが大きく、そしてマウンドとバッターボックスの距離が野球のそれと比べて狭いからである。また球威もかなりのものとなっている。

「受けるのに苦労しました」

「それはまた意外ですね」

「そんなに私達がスポーツをするのがおかしいでしょうか」

「いや、そうではないですが」

違和感があるのは事実である。

「それでも」

「文化部だと思われていましたか？」

「まあ確かに」

沙耶香もそれは認めた。

「それは否定しません」

「あの頃はソフトのことだけしか考えていませんでしたね」

「青春というわけですね」

「白球にかけた青春、と言えばキザでしょうか」

「キザというよりは少し古いですね」

沙耶香はそれを聞いてくすりと笑った。

## 第十五章

「まるで巨人の星ですが」

「また古い漫画を」

「あの漫画は好きではないのですがね、私は」

「そうなのですか」

「巨人は嫌いなので」

そしてこう述べた。

「あの様な連中には嫌悪感しか湧きませんね」

「はあ」

「あのチームが負けるのを見るのが楽しいのですよ。その為に家は読売新聞です」

「そこまでお嫌いなのですか」

「先生はどうなのですか」

「私はヤクルトファンなので」

これは合っていると思った。

「巨人は敵ですから」

「それはいい」

沙耶香はそれを聞いて我が意を得たと思った。

「私は愛する人にはあまり多くは求めませんが巨人ファンだけは嫌なのですよ」

「そんな」

絵里はそれを聞いて頬を赤らめさせた。昨夜のことを思い出したのである。

「貴女が巨人ファンでないと御聞きして何よりです」

「他には何を求められますか？」

「他は別に」

求めはしないと云った。

「ただ。美しければ」

そして二人で理事長のもとに向かった。昨日の報告をする為であった。

「昨日は見回られただけですか」

「はい」

昨日のことを素直に話した。ただし真由子とのことは絵里にも理事長にも内緒である。

「その結果何かおわかりになられたでしょうか」

「とりあえず頭の中にこの学園全体の地図は入れました」

沙耶香は述べた。

「何処に何があるのかを。そして今日から本格的な捜査に入らせて頂きます」

「わかりました。ではお願いします」

「そのうえでお願いがあるのですが」

「お願い？」

理事長はその言葉に反応した。

「何でしょうか」

「その失踪した生徒達のことです」

沙耶香はまた述べた。

「詳しい資料を頂きたいのですが。宜しいでしょうか」

「それぞれの個人に関するものですか？」

「そうです。宜しければ拝見させて頂きたいのですが」

「わかりました」

理事長はそれに頷いた。

「ではお渡しします。今回のことは全て貴女に一任させて頂いておりますので。ただ」

「わかっておりますよ」

沙耶香は理事長の危惧に応えた。

「個人情報ですので。外には……ですね」

「そうです。それだけは慎重にお願いします」

「わかりました。では」

失踪したそれぞれの学生達の資料を受け取った。そして教会の裏のあの当直室でそれを読みはじめたのであった。その結果あることがわかった。

「成程」

見れば失踪したのは美しい少女ばかりである。いずれも沙耶香が食指を伸ばしそうな少女ばかりであった。

「勿体無い。これ程の花達が」

彼女は資料を見ながら呟いた。

「消えてしまふとは。どうやら犯人は許し難い罪人のようね」

他のデータはバラバラであった。資産家や地位のある者の娘もいればそうでない者もいる。もっともこの学園は学費の関係でそうそう入られはしないのであるが。

美人といっても色々いる。だが今回失踪した少女達はどれも如何にもといった感じの深窓の令嬢といった外見の少女達ばかりであった。沙耶香が常に狙っているタイプばかりであったのだ。

許しておけないというのはあくまで沙耶香の個人的な感情である。だがこれは依頼でもありやはり行わなくてはならないものであった。そして彼女はそれを忘れてはいなかった。

立ち上がり部屋を後にする。そして今度は髪の毛を数本抜いた。

その髪の毛を床に放つとそれぞれ沙耶香の姿となった。彼女はその分身達に対して言った。

「行きなさい」

分身達はそれに従いそれぞれ学園内に散った。そこで何かを探らせていた。沙耶香は礼拝堂に出てそこから分身達が送る何かを感じているようであった。

「ふん」

今のところは何も感じられはしない。だが暫くして分身の中の一つから何かを送られてきた。

「そこね」

沙耶香は何かを受け取った。そして腕を一閃させた。

それで分身達の気配は消え去った。それを確かめてから礼拝堂を後にする。その際理事長から渡された資料も手に取った。これを放っておくわけにはいかなかったからだ。

## 第十六章

高等部に向かうともうその前から妖気が感じられた。禍々しく、身に纏わり付く様な妖気であった。

「これね」

沙耶香はその妖気を感じ取り呟いた。

「影が送ってくれたのは」

それで間違いがなかった。妖気はさらに強まり、沙耶香自身を覆うかの様であった。彼女はその妖気を感じながら高等部に入ってしまった。

中に入ると妖気はさらに強まった。まるで建物の中が無気味な赤紫の霧によって覆われているかの如くであった。彼女はそれを見ながら先に進む。

そして妖気の強まっていく方に歩いていった。歩きながらあることに気付いた。

「ここは」

それぞれの部活動の部室がある方だった。沙耶香はそれに気付き心なし不吉なものを感じていた。

そこには人形部の部室もあるのである。若しかするとあの部屋に、そうも考えた。

「けれどその時には」

だからといって躊躇う沙耶香ではなかった。これで躊躇っているようでは魔術師なぞ務まらないからであった。

部室のある通りへ向かう。そこは無気味に静まり返っていた。そして一歩一歩慎重に進んで行く。彼女は心の刃を研ぎ澄ましていたのであった。

その部屋の中には人形部の部室もある。もう扉が見えている。  
(若しかしたら)

彼女は思った。心無し身構える。そしてまた一歩踏み出した。そ

の時であった。

(!?)

人形部の扉が開いたのだ。そして妖気が急激に高まったのを感じた。沙耶香は素早く身構えた。

(来たわね!)

その手から鞭を出そうとする。だがそれは出すまでには至らなかつた。

「貴女は？」

扉から出て来たのは何の変哲もないシスターであった。あのシスターデリラであった。

「シスター」

沙耶香は彼女の姿を認めて鞭を収めた。そして普通の顔になった。「どうしてここに」

「私は人形部の顧問ですから」

彼女は笑ってそれに応えた。にこりと笑ったのであるうが妖艶な笑みであった。シスターの衣がその妖艶さとアンバランスを示し、そしてさらに妖しげなものを漂わせていた。

「用事があります」

「そうだったのですか」

沙耶香は何気無い様子を装ってそれに応える。だが妖気は強まるばかりで一向に収まっていなかった。

それもシスターデリラが出てから強まっている。彼女はそこに何かを感じていた。

「ところでシスター」

「何でしょうか」

シスターは沙耶香の言葉に応えた。

「こちらにどなたが来られませんでしたか？」

「申し訳ありませんが」

彼女はその問いに応じてきた。

「ずっと部屋に籠っておりましてので」

「左様ですか」

「はい。何もわかりません」

「わかりました。それでは」

「これで宜しいでしょうか」

「はい。実は人を探しておりまして」

「人を？」

「そう、その人は実に魅力的な人でしてね」

その切れ長の目を微妙に歪めて笑った。口元も微かに歪ませている。

「私は今その人を探しているのですよ」

「それ程魅力的な方なのですか」

「はい」

沙耶香は答えた。

「あまりにも魅力的で。追わずにはいられません」

「それはまた」

シスターもそれを聞いて笑った。

「素晴らしい方なのでしょうね」

「こちらにその人がいるかな、と思ったのですがね」

沙耶香はその目を歪ませたまま言った。黒い目にシスターの姿が映っている。

「残念です。おられないとは」

「若しかすると近くにおられるかも知れませんが」

「すぐ側にでも」

「さて、それはどうでしょう」

シスターはそれには思わせぶりに笑って返した。

「人は会いたい時にはいないもの」

そして言う。

「探せばいないものですからね」

「そして探し出した時には」

「その手の中に収めてしまうのに限ります」

「全く同感です」

口元の歪みをさらに高めて言った。

「そしてその手に抱かなければね」

「手の届く場所に置いておかなければ」

「ここでは意見は食い違った。」

「なりませんから」

この言葉は同時であった。ニュアンスも一緒であった。そうした意味で二人の結論は同じであった。だがその方法と欲望が違っていたのであった。

「それでは」

「はい」

二人は挨拶の後擦れ違った。黒と黒の服が交差する。そして影も二人は互いに擦れ違い振り返ることはなかった。しかし影は残っていた。

## 第十七章

「面白いことを言うわね」

沙耶香は擦れ違った後で一人立ち止まり呟いた。

「どうやら私と近い世界にいるようね」

そう呟いて笑った。そして妖気を探った。

妖気はまだその場に強く残っていた。だがそれは次第に遠のいていった。

「前に」

シスターの通り過ぎた方とは逆に。遠のいていた。

「しまったわね」

それを感じて舌打ちした。もう少しであったというのに。だが彼女は諦めたわけではなかった。妖気の内容は掴んだ。次に逃さなければいいと思ったからである。

分身を消し今度は自分の足でまた学園内を歩き回った。その結果妖気が感じられたのはそこだけであった。他には何処にも感じられなかった。このことから彼女は高等部にこそ謎があるのだと目星をつけるようになっていた。

その日はそのまま捜査と資料の調査を進めた。失踪した学生達のこととは頭に入ったがそれ以上の進展はなかった。だが妖気を察したのは大きかった。彼女はその妖気についても思案していたのであった。

妖気と一口に言っても何種類もある。黒い妖気もあれば青い妖気もある。そして赤い妖気も。

そして今回の様な赤紫の妖気も。これは女の妖気であった。しかも妖術を使い、邪な欲望に支配された女の妖気である。一概には言えないがその多くは性欲である場合が多い。

つまりこの妖気の持ち主は性欲に支配されている。それも普通ではない形の。これでかなり制限される筈であった。

「けれどこの場所ではね」

沙耶香は教会の奥のあの当直室で呟いた。ここはカトリックの学園である。そして女学校だ。他ならない沙耶香の様に同性愛の話は昔からないわけではないであろう。そして同時にカトリックの聖職者は婚姻を禁じられている。同性愛もだ。そこを誘惑するのが沙耶香であるが普通はそれは抑圧されている。その為歪になる場合も考えられるのだ。そこまで考えて沙耶香はあることに気付いた。

「聖職者」

そこであつた。そして女性となれば。一つしかない。

「シスターね」

彼女はまた目星をつけた。あの妖気の持ち主はシスターであるとそう考えていたのだ。

だがまだ断言は出来なかつた。まだあくまで可能性の一つに過ぎない。確信ではないのだ。その為とりあえずは高等部に入入りしているシスターについて調べることにした。まずはそれを聞くことにした。

「高等部に勤めているシスターですか」

「はい」

シスターミカエラにそれを尋ねたのである。沙耶香は彼女を見ながらこのシスターではないと思つていた。

妖気の兆候が全くないのである。そのオーラは白く、清浄であつた。趣きも同じであり、大人しく謙虚でありまさしくシスターといつた感じであつた。彼女でないのはすぐにわかるものであつた。

「どの様な方がおられますか」

心の中のそうした読みを隠して尋ねた。

「そして何人か」

「捜査と関係があるお話ですよね」

「勿論」

沙耶香は答えた。

「だからこそ御聞きしたいのですが」

「わかりました。それでは」

シスターミカエラは高等部にいるシスターに関して話した。その中にはミカエラ自身もおり、そしてシスターデリラもいたのであった。

「あの方もおられたのですか」

「はい、教義の先生でもあります」

シスターミカエラはこう答えた。

「教義!？」

「キリスト教の教義のことです」

彼女は沙耶香にこう説明した。

「私もそうなのですが」

「では同僚というわけですね」

「そうですね。私もシスターデリラも神にお仕えする者です」

「勿体無い」

それを聞いてふと本音が出てしまった。彼女にとってはシスターであっても御馳走となり得るのであるがそれでも機会があれば、である。その機会さえも奪われているからこそその言葉であった。

「勿体無い?」

シスターミカエラはそれを聞いてキョトンとした顔になった。

「何が勿体無いのでしょうか」

「いや、こちらの話です」

だが沙耶香はそれは誤魔化した。

「何でもありません。御気になさらずに」

「わかりました」

何か釈然としないものを感じていたが追求するつもりもなかった。

「シスターデリラもおられるのですね」

「そうです」

もう一度確認して確かな返事が返って来た。

「左様ですか」

「それで宜しいですか?」

「はい」

沙耶香は答えた。

「どうも。有り難うございました」

「いえいえ」

これで二人は別れた。そして沙耶香はまた人形部の部室に向かった。

既に放課後になっておりあちこちで帰る生徒や部活に向かう生徒達がいた。彼女達は沙耶香の姿を認めてヒソヒソと話をしていた。

「綺麗な人よね」

「本当。それに格好いい服」

そんな話だった。沙耶香の端麗な容姿に目がいつているのだ。

「宝塚の人かしら」

「モデルかも」

だが彼女はそれには構わなかった。今はそれよりも大事なことがあったからである。

人形部の部室に入った。見ればもう真由子がそこにいた。

「またいらしたんですね」

「そうよ」

沙耶香はこう言っつて真由子に挨拶を送った。

「こんにちは」

「はい、こんにちは」

真由子も沙耶香に挨拶を返した。それから言った。

「何の御用ですか？」

「人形を見せてもらいたくて」

沙耶香は真由子にこう言った。

「人形ですか」

「ええ、顧問のシスターデリラの人形をね。いいかしら」

「わかりました。ではお出します」

真由子はそれに応えてソファーから立ち上がった。それから奥の棚から人形を数体取り出してきた。

「こちらです」

そしてそれ等の人形をテーブルの上に置いた。そのうえで沙耶香にそれを見せた。

「どうでしょうか」

「凄いわね」

口ではこう褒めたが心の中では別のことを考えていた。

人形を見ていることは変わりがない。だが彼女は今その美しさを見ているのではなくその顔と姿を見ていたのであった。そして何かを探っていた。

服はそれぞれ違う。また髪型も。だが顔はどうなのか。見れば見たような顔ばかりであった。

「色々を作る先生なのね」

「はい」

真由子は明るい声で答えた。

「凄いですよね、これだけ色んなお人形を作られて」

「そうですね」

それに応えたがやはりその心では別のことを考えていた。

(似ているわね)

人形の顔を見て心の中でこう呟いた。

「何かあったのですか？」

真由子は沙耶香があまりにも人形達の顔ばかり見るので奇妙に思った。

「お人形さんのお顔ばかり御覧になられてますけど」

「綺麗だからね」

沙耶香はこう答えて誤魔化した。

「どの人形の顔も」

「そうでしたか」

それを聞いて安心したように笑った。

「そうですね、本当に綺麗な顔ばかりで」

「そうなのよね。よくこんな風に作れたわ」

関心したような声を出した。だが心の中では全く別の言葉を言っていた。

(これが本当に作ったものならね)

「それでですね」

「ええ」

「今度新作が出来るそうなんですよ」

「新作が？」

「また可愛い女の子のお人形さんらしいんです」

真由子は無邪気に喜びながら言った。

「楽しみですよ、どんなのが出来るのか」

「そうですね」

無機質な声で返事をしたが真由子には気付いてはいなかった。

「また出来たらお知らせしますね」

「お願いするわ」

そう言って席を立ち上がる。

「もう帰られるのですか？」

「もう少しお邪魔していいのかしら」

真由子の方を振り向きながら尋ねる。

「どうなのかしら」

「私の方は構いませんが」

顔を赤くして応える。昨日のことを思い出したのだ。

「けれどももう時間が遅いわよね」

「はい」

残念そうに頷いた。

「もうすぐ皆が来る時間です」

「だから仕方がないわ。今日は御免なさいね」

「また。いらして下さいますよね」

「ええ」

沙耶香は頷いて答えた。

「きつとね。それでいいかしら」

「それじゃあその時またお話させて頂きます」

「宜しくね。楽しみにしているわ」

「はい」

こうして部屋を後にした。沙耶香は廊下を歩きながら人形の顔を思い出していた。同時に失踪した少女達の顔も思い出していた。

(やっぱり似ているわね)

彼女は頭の中で人形の顔を少女達の顔をスライドさせていた。

(どういうわけか)

次にあの妖気のことをシュミレーションさせた。次に朝に人形部の窓から見えた影を。こうして考えていくと一つのことには思いが至るのであった。

(怪しいと思わない方がおかしいわ)

彼女は心の中で言った。

(ここまで揃って。けれどまだ動くのには早いかしら)

次に採るべき行動について考えていた。

(さて、どうしようかしらね)

考えながらグラウンドに出た。見ればそこではソフトボール部が練習をしていた。

## 第十八章

「ライト、いったわよ」  
「任せて」

女の子の掛け声が聞こえてくる。そして一人の少女がライトとフライを処理していた。

「ナイス！」  
「これ位ならね」

ライトを守っていた女の子がこう言葉を返していた。沙耶香はそれを見て思った。

(あれはそうそう簡単に取れる場所じゃなかったけれど)  
先程のライトフライに関してである。

「よく取れたわね、さっきのは」  
「貴女もそう思われますか？」

ここでそのグラウンドの方から声がした。  
「おっと」

不意に声に出してしまった。その迂闊さに舌打ちしながら声がした方に顔を向けた。

「さっきのは。そうは取れないですよね」  
「ええ、まあ」

その声の主に応えた。見ればこの学園の制服を着た少女である。茶色がかかった髪をショートにした元気のよさそうな少女である。栗色のはつきりとした目に日に焼けた明るい肌を持っている。

「貴女は」  
「斉藤玲子といます」  
少女はそう名乗った。

「斉藤さんね」  
「はい。ソフト部のマネージャーです」

「このソフト部の」

「去年入部して。そのままマネージャーをやってます」  
「そうなの」

二年であるということがわかった。

「ところでさっきのライトフライですけど」

「ええ、それね」

またその話になった。沙耶香はその玲子に顔を向けた。

「やっぱり。そうは取れませんよね」

「下手なライトだったら無理ね」

それは野球でもわかることであった。沙耶香は野球も観るのでそれはわかった。

「いいライトだと思うわ」

「有り難うございます」

「あれならセンターもいけるんじゃないかしら」

外野の守備はまずはセンターに最も守備のいい者を置くのが普通である。その次にライト、そしてレフトである。かつてはライトはそれ程重要視されていなかったが振り遅れや左バッターの増加、そしてライトゴロを狙うという意味から重要視されはじめた。イチロ―等がそのいい例である。

「センターはもっと凄いですよ」

「そうなの」

「うちの外野手じゃ一番です」

「そんなにいいのね」

「彼女で外野の殆どを守れる程です」

「頼りにしてるのね」

「ですからセンターをやってるんですよ」

「いえ、貴女が」

沙耶香はここで彼女にこう言った。

「そのセンターやってる娘を頼りにしてるのね」

「はい」

気持ちよくその問いに頷いてきた。

「彼女のおかげで。かなり守備がよくなりましたから」  
「そうなの」

「それまでうちの外野の守備って寂しいところがあったんですよ。けれど彼女が入ってくれて」

「その娘何年かしら」  
「一年です」

玲子は答えた。

「けれどすぐにレギュラーになりました」

「凄いわね、それは」

「小柄ですけど脚も速いですし肩も強いし。おまけにサウスポーで」

「福本みたいね」

「名前御存知なんですか」

「嘘」

沙耶香は名前を当てて逆に驚いた。彼女はかつての盗塁王福本豊のことを言っただけである。サウスポーで小柄ながら俊足と抜群の守備反応を誇った。もっとも肩は普通であったが弱いわけではなかった。野球の歴史にその名を残す名選手である。気さくな人柄でも知られている。

「その娘福本っていうの」

「そうですよ」

玲子は言った。

「うちの二番バッターなんですよ」

「ふうん」

「バントも上手いですし」

「平野を思い出すわね」

「うちのショートの名前ですよ」

「何か名前が重なるわね」

今度はおかしくて中日、そして西武で活躍した選手である。俊足強肩堅守、そして何よりもバントの名手として知られていた。西武黄金

時代を支えた選手でもある。

「よく当てられますね」

「福本とか平野って知らないかしら」

「誰ですか、それ」

どうやら本当に知らないようであった。キョトンとした顔になっていた。

「最近の娘は知らないのね、やっぱり」

「野球は観ていますけど」

「どこのファンかしら」

「中日です」

彼女は答えた。

「母が名古屋出身でして」

「ああ、成程」

名古屋は大阪や広島と同じである。応援する球団と言えば中日なのだ。巨人を応援するのは大阪のそれ程ではないがやはり少数派であった。やはり名古屋ドームの一塁側スタンドで巨人を応援するとは命を捨てるのと同じである。

「それで私も」

「じゃあ好きな選手は福留かしら」

「大好きです」

声が明るくなった。

「あと立浪選手も」

「そうね、格好いいわよね」

「額も好きです。川上選手の額も」

「……それはどうかしら」

少し彼女の男性の好みが普通の女の子のそれとは違う様な気がした。かなりマニアックなものに思えた。

「まあ巨人を応援していなければいいわ」

「そうなんですか」

「あの球団だけは駄目なのよ」

沙耶香は忌々しげに言った。

「どうしても好きになれないの」

「はあ」

「とにかくいいチームみたいね」

「派手さはないですけど守り勝つチームです」

「それもいいわ。野球はただ打つだけじゃないから」

「そうですね」

「ホームランバッターばかりを集めて勝てたら野球なんて面白くな

いから。豪快なだけの男は嫌いよ」

沙耶香は思わせぶりに呟いた。

「男も。繊細でないと」

そう言ってから玲子に顔を戻した。

「女の子もよ」

「そう言われますと」

玲子は困った顔になった。

「私も自信が」

「いえ、貴女は合格よ」

沙耶香はこう言って笑った。

「私にはわかるわ」

「わかるんですか」

「そうよ。今度二人でお話したいわね」

そして彼女自身の野望を隠しながら言った。

「楽しい一時を過ごす為にね。それじゃ」

そう言っただけでその場を立ち去った。この日はこのまま学園を後にし

た。しかしこの時彼女は知らなかった。あの妖気が遂に実体になる

うとしていくことに。

## 第十九章

次の日学園にやって来ると異変が起こっていた。また少女が失踪したのであった。

「私が捜査をしている間に」

沙耶香はそれを絵里から聞いた。そして思わず心の中で舌打ちをした。

「やってくれるわね」

「それでその失踪した生徒ですが」

絵里は明らかに狼狽が見てとれる顔で沙耶香に話していた。二人は今理事長室にいた。まだ理事長は来てはいない。

「斉藤玲子という娘です」

「ソフトボール部のマネージャーのですか」

昨日会った娘だ。沙耶香にはすぐにわかった。

「ええ、御存知なのですか」

「昨日会って話をしたので」

沙耶香はそう説明した。

「部活の最中に。可愛い娘ですよね」

「はい」

絵里はそれに答えた。

「昨日家族の方から電話がありました。まだ帰っていないと」

「それで失踪だと」

「たまにあるのです。生徒がその、いけない遊びを知って」

つまり夜遊びをである。この年代の女の子には付き物の話だ。

「家を出ることが。けれどそんなことはしない娘ですし」

「一緒に帰った生徒とかはいないのですか？」

「まだ調べていませんが。家には帰っていないそうです」

「誘拐とかの可能性もありますよね」

「それも考えていますが。やはり」

「私の事件と関係があると」

「私はそう思います」

絵里は暗い顔でそれに答えた。

「どうでしょうか」

「おそらくそうですね」

沙耶香もそれに言葉を返した。

「これは私の勘でまだ調べてもいませんが」

「そう思われますか」

「この学園で続けて失踪事件が起きていますね」

「はい」

その解決の為に沙耶香を呼んでいるのはもう言うまでもないことであつた。

「そしてまた。やはり疑わしいでしょう」

「便乗犯の可能性もあるでしょうが」

「その可能性は否定出来ませんが。まずは理事長とお話しましょう」  
「わかりました」

絵里はそれに頷いた。そして理事長を待った。

暫くして理事長が部屋に入って来た。ある程度予想はしていたが強張った顔をしていた。

「お早うございます」

理事長の方から挨拶をかけた。

「は、お早うございます」

「話は聞いています」

もう既に知っているようであつた。これも予想通りであつた。

「今度は二年の生徒ですね」

「はい」

絵里がそれに答える。

「家には帰っていないとのことですよ」

「それだけでしたらまだ話はいいのですけどね」

理事長は暗い顔でこう述べた。

「問題はその失踪の経緯です」

「はい」

「例によつて何もわかつていません」

「そして私の仕事であると」

「この件に關しても御願ひ出来ますか」

「御願ひされるも何も私の仕事ですから」

沙耶香はこう返した。

「これまで通りやらせて頂きます。それで宜しいですね」

「はい、御願ひします」

「わかりました。では今日は彼女に關する捜査を中心にやらせて頂きます」

「そこで何かがあればいいですが」

「わかればいいではありませんね、この場合は」

沙耶香はその張りのある声で言った。

「掴むのですよ、その何かを」

「その何かを」

「お任せ下さい。尻尾は必ず掴みます」

その目が鋭くなっていた。

「必ずね。では今日はこれで」

「はい」

一礼した後で部屋を後にする。理事長はそんな沙耶香の後ろ姿を見送つて言った。

「怒つておられますね」

「怒つておられる」

「はい。自らのプライドを傷付けられて」

理事長にはそれがわかつていた。

「おそらく御自身がおられる時に事件が起こつたことにプライドを傷付けられたと思つているのでしょう」

「そうですね」

「それだけ本気になられたということでもありません」

そしてこう言った。

「本気になられたあの方の御力、期待させて頂きましょう」  
「わかりました」

沙耶香には二人の話は届いていなかった。だが彼女が本気になったのは事実であった。まずは昨日話したグラウンドに向かった。

そこではもう授業がはじまっていた。生徒達が元気に動き回っている。

「確かこの辺りね」

そのグラウンドを見回しながら呟いた。

「昨日会って話したのは」

おおよその場所はわかっていた。その辺りを調べていた。

## 第二十章

「確かあの娘の気は」

次に気を探る。

「これね。間違いないわ」

それを見つけた。おもむろにそれを探る。

「教室に部室」

彼女の気の動きが頭の中で描かれる。そして昨日のおおよその動きがわかった。

「家には帰っていないわね。そして」

学校からも出ていなかった。ここで彼女が学校で失踪したことがわかった。

「間違いないわ。学校で消えている」

玲子が学校で失踪したのはわかった。だがまだ問題は残っていた。

「ただ、何処で消えたのかしら」

ここを去り部室に入り、そこから出たところで気は途切れているのである。

「おかしいわね。こんな筈は」

沙耶香はそこに異変を感じていた。

「ないのだけれど。行ってみる必要があるそうね」

ここで彼女はソフトボール部の部室に向かうことにした。そのまま一人グラウンドを後にしたのであった。

ソフトボール部の部室は他の部活と何の変哲もない部屋であった。人形部のそれと何等変わりのない扉であった。少なくとも外見はそうであった。

「見たところ何も変化はないわね」

気もここで途切れているのははっきりしていた。

「中も。何もなさそうね」

気を探ってみる。やはり何も感じられなかった。

「じゃあ一体……!?」

探っているとおある気を察した。

「これは」

あの時感じた妖気であった。赤紫の気がそこにあつた。

「まさか……これは」

人形部の部室の前で感じたあの気が。そこにも確かにあつたのだ。

「それじゃあまさか」

彼女の中で繋がった。あの妖気と失踪事件には& a m p ; # 3 2

363 ; がりがあるのだ。今彼女はそれを直感的に悟った。

「それなら」

彼女はすぐにそこを後にした。そして人形部の部室の前に向かう。

そこでまた気を探るのであつた。

今度ははつきりとしていた。妖気がまだそこに残っていた。

「あの時は」

気は上の方に逃れていた。その気を探る。そして彼女はそれに従

い屋上まで出た。するとそこには一個の人形がポツンと落ちていた

のであつた。

「この人形ね」

まだ妖気が残っていた。それでまた一つのことかわかつた。

「あの時妖気の主はこれを使い私の気を逸らした」

沙耶香はまた一つわかつた。

「そしてその間に逃げた。私から」

何故逃げる必要があるのか。自分のことを知られない為だ。

「私のことを気付いている。そして若しかしたら」

自分もその妖気の持ち主を知っているのかも知れないと思った。

「だとすれば限られてくるわね」

妖気の主が。今心の中でそれを調べる。

「それにしてもやってくれるわ」

沙耶香はそこに転がる人形を見下ろして口の端だけで笑った。

「こんなもので私をかわすとは。中々憎い演出をしてくれるわ」

だがそれもここまでだと思った。沙耶香はその人形を手を取って屋上を後にした。そしてそのまま別の場所に向かうのであった。

## 第二十一章

沙耶香はその日は気を調べることに専念した。学校の至る所であの赤紫の気を調べた。

「やはり高等部だけね」

一通り調べてそれがわかった。

「あの気が感じられるのは」

それと共に心の中である疑念が生じた。

「そしてその気が感じられた時」

出会った一人の人物のことが脳裏に浮かんだ。

「そしてこの人形」

それがまた沙耶香にあることを教えていた。

「全てが繋がったのかしら」

だが確信は持てない。沙耶香はさらに気を探ることにした。

やはり気は高等部にしかない。そしてそれが感じられる場所も限られていた。彼女は今密かに敵の尻尾を掴み、その主を押さえようとしていたのであった。

翌日その気が感じられた場所を歩いて行く。一つずつ調べ、中にも入る。だが何処にも確かなものはなかった。

「教室、教会」

一つずつ調べて行く。

「そして職員室。後は」

最後の一つに近付いていた。

「ここね」

そこは部室であった。あの人形部の部室である。

「私の予想が正しければ犯人は」

もうおおよそのことは感じていた。

「間違いないわね。では入るとするわ」

そう言っって壁に手を当てた。そのままズブズブと入って行く。

そして部屋の中に入った。気を探るところが一番強かった。それも尋常なものではなかった。

「隠しているつもりだったけれどあまりにも強くて隠しきれなかったようね」

沙耶香はその赤紫の気を感じながら呟いた。

「本気で調べたら。すぐわかったわ」

そう呟きながら柵に向かう。

その柵を開ける。目的は先日真由子が見せてくれた人形達である。どれもあのシスターデリラが作ったあの人形達だ。そこに秘密があった。

「ここにあつた筈ね」

柵を開ける。そして中を覗いた。

だがそこには何もなかった。人形も何もかもがなかったのであつた。

「気付かれたみたいね」

沙耶香はその何もない柵の中を見て呟いた。

「やってくれること、相手も」

そう言つて微笑んだ。だがこれで犯人は誰かわかった。後は解決するだけである。彼女は部屋を後にして自身の気配も消した。これでこの日は捜査を終えた。

「終わるのですね」

「ええ」

そして理事長室において理事長と絵里に話をした。二人はそれを聞いて思わず声をあげた。

「それはもうすぐです」

「手懸かりを見つけられたのですね」

「はい」

沙耶香は答えた。

「確実なものを。後は犯人を取り押さえるだけです」

「犯人は一体」

「それは事件を終えてからお話させて頂きます」

だが彼女は犯人については今は言おうとはしなかった。

「今は。お話するわけにはいきません」

「私達に対してもですか？」

「申し訳ありませんが」

彼女は言った。

## 第二十二章

「今は御容赦下さい」

「何かあるのですね」

理事長は沙耶香の目を見てそれを察した。

「そしてそれは通常の世界では有り得ないこと」

「ですから私がここに呼ばれたと思いますが」

その言葉に対して沙耶香はこう返した。

「普通の事件ならば。私は呼ばれはしません」

「はい」

これには絵里が応えた。

「私も理事長もそう感じたからこそ」

「ですね。そしてそれを今ここでお話しても貴女達を混乱させることになると思っています」

だから今は犯人に関しては言わないのであった。

「ですが御安心を。一連の事件は既に解決したも同然です」

「左様ですか」

「はい。私の魔術に勝てた者はいません」

沙耶香の唇が微かに歪んだ。そして笑った。

「ただ一人。対抗出来る者はいませんが」

「それはどなたですか？」

「おっと失礼」

沙耶香は失言を詫びた。

「関係のないお話でした。まあ一人の占い師ですが」

「そうのですか」

「変わった人でしてね。私とは何かと縁があります」

「はあ」

「まあ今にはいませんので。そのうち機会があればお話させて頂きます」

「わかりました」

「そして事件に関してですが」

「はい」

理事長の声に顔を向けた。

「解決は間も無くなのですね」

「先程申し上げた通りです」

沙耶香はまた答えた。

「明日にでも」

「わかりました。では最後までお任せします」

「有り難うございます」

「是非共。解決して下さいね」

「お任せ下さい」

こうして沙耶香はこの日はこれで学園を後にした。実は絵里から誘われたのだがこの日はやんわりと断った。そして夜一人バーで飲んでいた。

煙草をふかしカウンターに座っている。薄暗く大人のムードの店の中でたたずみ注文したカクテルを待つ。その間彼女は特に何も考えずカウンターにあるグラスを見ていた。

グラスは店の弱い光を反射させて輝いていた。そして彼女はそれを見ながら煙草を吸っていた。煙草の青い煙がその弱い光の中に漂う。そして口から白い煙を吐き出した時にカクテルがやって来た。

しかしそれは彼女が頼んだカクテルではなかった。彼女はスティンガーを頼んだ。だがやって来たのはフローズンベリーであった。赤紫のカクテルであった。

「注文が違うわよ」

沙耶香はそれを見てバーテンに対して言った。

「それとも貴方のおごりかしら」

このバーテンとは顔馴染みである。目だけで笑ってこう尋ねた。

「残念ですが私のおごりではありません」

そのバーテンはダンディな物腰でこう答えた。

「あるお客様からもおごりです」

「誰かしら」

「それは……あつ」

バーテンは左側を向いて声をあげた。

「もう店を出られたようです」

「そうなの」

沙耶香は目の前にやって来た。フローズンの赤紫の色を見ながら  
呟いた。

「そのお客様はもしかして女の人ではないかしら」

「はい、そうです」

バーテンはその言葉に隠された意味を知ることもなくすぐに返した。

「そして色気のある美人よね」

「その通りです。お知り合いの方ですか？」

「ちよつとね」

沙耶香はくすりと笑って答えた。

「知らない仲ではないわ」

「左様ですか」

「それでこれを私に、なのね」

「はい」

「わかったわ。じゃあ頂いておくわ」

「それが宜しいかと」

「けれど私のスティングーも御願いな」

「わかっております。すぐに作らせて頂きます」

「楽しみに待ってるわ」

それに応えながらフローズンを手に取った。そして再びその赤紫の姿を見る。グラスの向こうで光を透かして妖しく光っていた。

「宣戦布告というわけね」

そう呟いてまた笑った。このカクテルの意味は実によくわかった。沙耶香はそれを飲み来たるべき時に想いを馳せ妖しく微笑むのであ

つ  
た。

## 第二十三章

そのカクテルを飲んだ次の日であった。沙耶香は少し遅い時間に学園にやって来た。そして理事長に軽い挨拶をした後で一人あの人形があつた屋上に向かった。

そしてそこからグラウンドを見下ろしながら煙草を吸っていた。青い空に煙が漂っている。

彼女はグラウンドを見ていた。だがその心ではそこを見ていたわけではなかった。別のもの、そして別の場所を見ていたのであつた。煙草を吸い終わった時だった。後ろから気配がした。

「遅かつたわね」

沙耶香は後ろを振り返らずにこう言った。煙草は指から出した炎で燃やし尽くした。

「貴女を探していたから」

その気配の主はその言葉に対してこう返してきた。

「探したわよ、何処にいるか」

「すぐにわかると思つたけれど」

沙耶香はなお後ろを振り返らない。気配の主は背を向けたまま言う。

「こっちは気配を思いきり出してあげてたから」

「随分黒い気ね」

「ふふふ」

沙耶香はそう言われて笑った。

「面白い表現ね」

「こんな気ははじめてだわ」

気配の主はそれに応えてまた言った。

「まるで魔王みたいなの」

「言い過ぎね、それは」

沙耶香の笑みが強くなつた。

「私はそこまで凄くはないわよ」

「どうかしら」

「もっともここでやられるつもりはないけれどね」

「私に。勝つつもりかしら」

「ええ」

沙耶香は頷いた。

「負けたことはないから」

「大した自信ね」

「貴女もそうみたいだけれど」

そしてようやく後ろを振り向いた。

「違うかしら、シスター」

「確かにね」

声の主はそれを認めた。そこにはシスターデリラがいた。

「昨夜のカクテル御馳走様」

「気に入ってもらえたみたいね」

「カクテルも好きだから」

沙耶香は笑いつつこう返した。

「気分よく飲ませてもらったわ」

「それじゃあ受け取ってくれたわね」

「勿論」

笑っていた。そしてシスターデリラを見ていた。

「宣戦布告ね」

「そうよ。もっともその前から戦いははじまっていたけれど」

「こうして実際に対峙するのはね。はじめてよね」

「そうね。まさかこうなるとは思わなかったわ」

「私は望んでいたけれど」

そう言いながら右腕を掲げる。そしてそこに氷の刃を出してきた。

「元々こっちが仕事だったから」

「仕事ね」

「魔術師としてね。この事件を解決することが」

「そう。それじゃあ私のことも知ってるわね」

「一連の事件の犯人は貴女ね」

「今更隠してもどうにもならないわね」

「シスターデリラもまた笑った。妖艶な笑みであった。

「そうよ。私がやったの」

「魔術で」

「人形はね、魔法なのよ」

その言葉には何かを含んでいた。

「術を使つて。作るのよ」

「女の子達が消えたのは貴女に人形にされていたから」

「綺麗だったでしょ」

「とてもね。まるで生きているみたいだったわ」

「だって生きていますもの」

「シスターは妖艶な笑みのままこう返した。

「生きている」

「そうよ。彼女達は人形にされただけ。ちゃんと生きているわよ」

「それを聞いて安心したわ」

「沙耶香の顔に安堵の笑みが微かに浮かんだ。

「死んでいたら。私の御馳走がなくなるから」

「御馳走ね」

「女の子はこの上ない御馳走よ」

その趣味の対象として。

「もつとも貴女と私では楽しみ方が違うみたいだけれど」

「私は彼女達を食べたりはしないわ」

このシスターもどうやら同性愛者の様である。だがその嗜好は沙

耶香のそれとはいささか違っていた。

「眺めて、飾っておくのは好きだけれど」

「勿体ないわね、それじゃあ」

当然沙耶香はそれには賛同しなかった。彼女にとってはまずは肉欲こそが第一であるからだ。

「味あわないなんて」

「貴女にはわからないでしょうね。美しいものを側に飾っておく」との素晴らしさが」

「ええ、そんな趣味はないから」

沙耶香もそれは認めた。

「私は芸術品は実際に味あう趣味なのよ」

「グルメというわけね」

「そして貴女はコレクター」

「ええ」

シスターはその言葉に頷いた。

「そしてこれからもそれは増えるわ」

「残念ね、それは今日で終わるわ」

「貴女に倒されて？」

「そうよ。覚悟は出来てるわよね」

その氷の刃が大きくなる。剣になった。青い刀身を持つ剣であった。

「これが仕事だから。悪く思わないでね」

「それじゃあ私も見せないと駄目ね」

シスターも身構えた。その周りから何かが出て来る。

「私の技を。かかって来なさい」

それは人形達であった。マネキンである。それ等が床から出て来た。そしてシスターの周りを取り囲んでいた。

## 第二十四章

「私の趣味は。誰にも邪魔させないから」

「それじゃあ行かせてもらおうわ」

沙耶香はそれを聞いてこう返した。

「ここでね。決める為に」

前に出る。そこを人形達が襲い掛かる。

「傀儡達ね、これは」

人形はその手を振り回して沙耶香を害しようとする。彼女はそれを避けながら言った。

「そうよ。これは単なる人形」

シスターはその後ろにいた。それに応えて言う。

「人から作ったものではないわ。だから安心して相手をしてね」

「人間がもともとも相手をするつもりだったけれど」

沙耶香はなおも攻撃から避けていた。

「それを聞いて安心したわ。気兼ねなくやれるわね」

剣を横に振るった。それで前にいた人形を両断した。

両断された人形は忽ちのうちに凍りついた。そして床に転がり砕け散ってしまった。

「面白い術ね」

「黒魔術の一つよ」

沙耶香はシスターに言葉を返した。

「氷の剣。これに触れたらどんな者でも凍りつく」

「魔剣というやつね」

「そうよ、そしてこれに触れたら貴女も氷になるわよ」

「氷の人形ね」

「なってみたいかしら」

「綺麗だけれど遠慮するわ。私の趣味とは離れているから」  
そう言いながらまた周囲から人形を出す。

「けれど貴女をそうするのは面白いかも。黒い魔術師さん」  
「私はそんな名前じゃないわよ」

沙耶香はまた一体氷にした。そして砕きながら言った。  
「松本沙耶香っていう名前があるのよ。覚えていてね」

「それじゃあ覚えておくわ。松本沙耶香さん」

シスターもそれに応える形で言葉を返した。

「新しいお人形の名前として」

「本当に人形が好きみたいね」

「ええ」

シスターはその言葉に頷いた。

「私はずっと人形を作ってきたから。綺麗な人形を作るのが好きだったわ」

その言葉は半ば独白であった。

「次の人形はさらに綺麗に。そして人間そっくりに」

「そう思っ作ってきたのね」

「そう。そして次第に人間そのものをそうしたいと思ってきたわ」

「悪魔に魂を売ってでも」

「悪魔？違うわ」

だがシスターはそれは否定した。

「これは神の御業なのよ。美しいものを永遠に留めようという」

「へえ」

沙耶香はそれを聞いて声をあげた。そしてシスターの後ろに何かを見ていた。

「悪魔ではないわ」

「そうなの」

だが沙耶香の返答は空虚なものであった。信じているようには見えなかった。

「彼女達は今私の家に置いているわ」

場所も言った。

「私の側に。永遠にね」

「そして私もそこに並ぶのね」  
「そうよ」

その言葉に頷く。

「楽しみにして置いてね。貴女もまた美しく飾ってあげるから」  
「生憎私はそのつもりはないわ」

沙耶香はその言葉に対して不敵な言葉で応えた。

「さっき言ったけれど」

「我儘ね」

「我儘はね、女の特権なのよ」

これは沙耶香の持論であった。

「少なくとも男のそれよりは許されるわ」

「許す許さないは相手が決めることよ」

「じゃあ決めさせてあげるわ」

沙耶香はまた人形を切った。氷になり砕け散る。

「貴女に勝ってね」

「まだ勝てるつもりなのが凄いわね」

シスターはその言葉を聞いてまた笑った。

「私に指一本触れられていないのに」

「それは簡単に出来るわ」

「嘘仰い」

だが彼女はそれを信じようとはしなかった。

「その有様で」

「言っておくけれど傀儡を使うのは貴女だけではないわよ」

「どういうことかしら」

それを聞いたシスターの眉がピクリと動いた。

「そのままよ。私も傀儡を使えるの」

「人形かしら」

「少し違うわね」

だが沙耶香の返事は素っ気無いものであった。

「それはね。こういうことよ」

突如としてシスターの後ろから声がした。

「!?!」

「気がつかなかったかしら」

後ろの床からもう一人姿を現わした。それは何と他ならぬ沙耶香自身であった。彼女は床からその黒い身体を出させてきたのであった。

「私の気配に」

「馬鹿な、こんなことが」

「そう思いたいでしょうね。けれどこれは現実のことなのよ」

沙耶香は後ろをとった。その手にはやはり氷の剣があった。

「私が今ここにいることは」

「それでは今私が目の前に見ているものは」

「そう、私の傀儡」

「よく見て御覧なさい、私を」 シスターの前にいる沙耶香も口を開いた。笑みが誘い込む様なものになっていた。まるで魔界に引き込まうとする悪魔の様な笑みであった。

「私の影を」

「影……まさか」

「そう、そのまさかよ」

後ろにいる沙耶香が言った。

「私は影」

次に前にいる沙耶香が。見ればその沙耶香には影がなかった。そして後ろにいる沙耶香にも。太陽の下にありながら影がなかった。

「影を傀儡に」

「ええ。傀儡は人形だけではないのよ」

「影も使えるの」

二人の沙耶香は同時に語った。

「それに気付かなかったとは。迂闊ね」

「参ったわね。こんなことを仕掛けて来るなんて」

「考えたわ、私も」

「そう、私も」

また二人の沙耶香が言った。

「どうしたら。貴女を出し抜けるかを」

「そして。考えたのがこれだったのよ」

「傀儡を使う私に対してあえて傀儡を見せたのね」

「ええ」

「そういうことよ」

二人はそれを認めた。

「そして貴女はそれにかかった」

「逃れられぬ罠に。さて、いいかしら」

二人はシスターに尋ねてきた。

「覚悟は」

「こうなつては覚悟するしかないようね」

シスターは諦めた様な笑みを浮かべて頷いた。

「いいわ。やりなさい」

そして言った。

「私の芸術が。消えてしまふのは残念なことだけれど」

「さつきも言った筈よ」

「芸術は味わうもの。見ているだけでは詰まらないのよ」

影もまた本体と同じ考えであった。

「それをわからなかったのが」

「貴女の間違いね」

後ろから、そして前から沙耶香は仕掛けた。影の沙耶香は跳んだ。

そして剣を振り下ろす。

本来の沙耶香は剣を横に払った。二人は同時に何かを斬った。

シスターを斬ったのは間違いなかった。だがシスターの身体には

傷一つついてはいなかった。

シスターはゆっくりと倒れ込んだ。そして前に伏してしまった。

「これでいいわね」

「ええ」

二人の沙耶香は互いの顔を見て頷き合った。

「彼女に憑いていたものは斬り払った。これで全てが終わりね」  
「そうね。けれどそれは何だったのかしら」

影が本体に問うた。

「彼女に憑いていたのは」

「妄執よ」

「妄執」

「そう。それが彼女を狂わせていたのよ」

「それがあまりにも大きくなって。彼女を支配していたのね」

「そうね。だからあんな術を使えるようになった」

「妄執が全てを支配していて」

影は本体の言葉を聞き考える顔になった。

「まるで魔物みたいね、その妄執は」

「実際に魔物だったのでしょうね」

本体もそれを認めた。

「だから。ここまですなつたのよ」

「けれど今その妄執も滅んだ」

「これで人形にされていた娘達も元に戻るわね」

「そして彼女自身も」

影はシスターを見下ろして言った。

「一件落着ね」

「そうね。それじゃあ戻ろうかしら」

本体は影に対して声をかけた。

「一つに」

「そうね」

影はすっと笑った。そして本体に歩み寄って来た。

「また一つになりましょう」

「ええ」

影は本体の顔に己の顔を近付けた。近付けながら目をゆっくりと閉じる。

そして軽く接吻をした。それと同時にゆっくりと、霞の様に姿を消していく。影は次第に沙耶香の後ろに戻ってきた。

「これでよし」

沙耶香は影が完全に戻ったのを確認して言った。

「全ては。終わったわね」

シスターを抱きかかえる。そして彼女を抱いたまま屋上を後にする。こうしてこの学園を覆った暗い霧は消え去ったのであった。

## 第二十五章

沙耶香はその話を理事長と絵里に話した。三人は理事長室にいた。

「そうだったのですか」

理事長はそれを聞いて深刻な顔で大きく溜息をついた。

「シスターデリラが」

「正確に言っていると彼女に憑いていた妄執です」

沙耶香はそう説明した。

「彼女自身は。全く気付いていません」

「そして知りもしないのですね」

「はい」

沙耶香は答えた。

「何一つ。完全に取り込まれていましたから」

「では彼女に罪はないということになりますね」

「そうですね」

沙耶香は理事長のその言葉に頷いた。

「彼女自身がやったのではないですから」

「わかりました。では彼女には罪は問いません」

「はい」

「事件は。こちらで公には失踪事件として処理します」

「その際は男のものではなく女の犯人の仕業とした方がいいでしょうね」

「彼女達の貞節の為ですか」

「はい。事件の発表は警察と連絡を取られればいいでしょう」

次にこうアドバイスした。

「こつした事件は。常にそう表向きには言い繕われているのですから」

「そうですね」

「世の中はね、表に出るものだけではないのですよ」

沙耶香は思わせぶりに言った。

「実際にはその裏があります。そして」

「その裏にこそ真実があると」

「そうした場合もあります。そうでない場合もありますが」

「はあ」

「表と裏は決してどちらが正しく、どちらが間違っているといつともありません。全ては同じなのです」

「貴女もそうですね」

「はい」

絵里の言葉に頷いてみせた。

「私は裏の方におりますが」

「ええ」

「しかし正しくないとは限らないでしょう」

「確かに」

絵里はここで頬を赤らめさせた。

「それは。よくわかりました」

「そしてですね」

今度は理事長が声をかけてきた。

「何でしょうか」

「失踪した生徒達は無事に帰って来たと家族から連絡がありました」

「それは何よりです」

「シスターデリラは入院しております」

「はい」

「外傷も精神的な問題もなく、すぐに退院出来るとのことですよ」

「そうですね。彼女もまた今回は人形だったのですから」

「人形!？」

「そうですね。妄執に捉われた」

沙耶香はそう語った。

「人形になっていたのですよ。そしてそれに操られていた」

「今回の犯人はその妄執だったのですね」

「そうです」

沙耶香は答えた。

「彼女もまた。犠牲者だったのですよ」

「彼女もまた傀儡だったと」

「そうです。全ては人形が行ってきたこと」

「そして貴女はその人形を倒された」

「はい」

こくりと頷いた。

「私もまた人形を使ってね」

「どうされたのですか？」

「どの様な人形を使われて」

「何、誰でも持っているものですよ」

二人の問いに穏やかな顔で答えた。

「誰でも持っている人形です」

「誰でも？」

「はい、必ず一つね。誰でも持っているものです」

にこやかに笑ってこう述べた。

「何でしょうか、それは」

「もう一人の自分です」

「はあ」

そう言われても二人には今一つわからなかった。首を捻るばかりであった。

「今もそれは姿を見せていますが」

「何のことかよくわかりませんが」

「それもおいおいわかりになられると思いますよ」

「そうなのですか」

「全ては表と裏があるのです」

沙耶香はまたそれについて言及した。

「そして表も裏も別の世界ではなく同じ世界にある。それを繋ぎ合  
わせているのが」

「魔性なのでしょうか」

「そういうことになります。では仕事が終わりましたのでこれで」  
「あの」

だがここで二人は沙耶香を呼び止めた。

「何か？」

彼女はそれに応えて扉の前で振り向いた。奇しくも真由子との情事の後と同じ態勢であった。

「また。御呼びして宜しいですか」

理事長が尋ねてきた。

「何か事件があれば」

「ええ、どうぞ」

沙耶香は笑ってそれに対して頷いた。

「お話を持って頂ければ。宜しければ個人的なお話でも」

そう言っつて絵里を目だけで見える。彼女もそれに気付いた。

「えっ」

「何時でもお待ちしておりますので。それで宜しいですね」

「は、はい」

絵里は顔を赤らめて頷いた。まるで恋をする少女の様な様子であった。理事長はそんな彼女を見ていささか奇妙な感觸を覚えた。

「森岡先生、どうかされたのですか？」

「えっ、いえ」

理事長の言葉を耳にして慌てて体面を取り繕った。

「何でもないです」

「そうなのですか」

「そう、何でもないですよ」

沙耶香は笑って言った。同時に心の中で言った。

（表に出ているものを見る限りは）

そしてあらためて言った。

「また。お待ちしています」

「あのバーですね」

「はい」

そして絵里の言葉に応じた。

「何時でもおいで下さい」

「わかりました」

「お待ちしておりますよ。薔薇色のワインと共に」

それが最後の言葉であった。最後に一礼して学園を後にする。後には影一つ残ってはいなかった。

黒魔術師松本沙耶香 人形篇 完

2006・4・16

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6983a/>

---

黒魔術師松本沙耶香 人形篇

2009年6月21日22時45分発行